

三國史記高句麗本紀の原典批判

三
品
彰
英

目次

第一節 高句麗本紀の後半部とその史料……………	三
第一項 史料的に見たる麗紀の斷層的現象……………	三
第二項 麗紀後半に使用された高句麗側の史料……………	一七
第三項 麗紀の參考した半島側史籍及び史料……………	二六
第二節 高句麗本紀の前半部に見られる特色……………	三二
第一項 對外關係記事の取扱ひ……………	三一
第二項 王世系に關する國內史料……………	四〇
第三項 自國の傳承史料の取扱ひ……………	五一

第一節 高句麗本紀の後半部とその史料

第一項 史料的に見たる麗紀の斷層的現象

高句麗史の研究に當つて、先づ據るべき史料の第一は『三國史記』高句麗本紀であり、次に支那史籍に散見する高句麗關係の諸文獻である。特に高句麗史の研究には、新羅史・百濟史の研究に比して、支那史籍の史料が内容的にも量的にも甚だしく重大な役割をつとめてゐる。麗紀の内容を點檢すれば明らかな如く、支那史籍より轉載せる部分が甚だ多く、従つて麗紀撰述に當つて既に支那史料が多く參考されたことを窺ひ得べく、今若し假に高句麗側の史料のみによつたとするならば、麗紀は今日あるが如き形を成し得なかつたであらう。かく高句麗側の國內史料と支那側の國外史料とから組立てられてゐるところに麗紀の一大特色が見られるとすれば、吾人は研究準備として先づ麗紀の内容を國內史料による部分と國外史料による部分とに分析して見る必要がある。何故なら國內史料と國外史料とは、その史料價值が質的に全く相違するものであり、従つて兩者の取扱ひは必然的に異らなくてはならぬ。

さて麗紀を通讀した何人もが氣付くであらうことは、美川王紀の中頃、詳しくは同王の十二年（三一一年）以後とそれ以前とに於て記事内容の性質が著しく相違してゐることである。支那史籍と一一照合する如き手數をかけなくとも、さうした前後の相違は麗紀を通讀しただけで明瞭である。特に高句麗の國內的な歴史を知らんとしてこれを一讀する者があるならば、同王の十二年以後に至つて、麗紀の記事の量的豊富さにも拘らず、突然さうした方面の史料を殆ど見出し得なくなると云ふ顯著な事實に氣付くであらう。例へば高句麗の社會組織研究の一史料となる高句麗の人

名の摘出を試みるとするならば、同王の十二年以後に至ると固有の高句麗的な稱呼を持つ人名を殆ど見出し得なくなるのである。その他の内部的歴史に關する問題に就いても同じことが云へる。これを一言にして云へば、美川王十二年を分界としてその前と後とで麗紀は顯著な質的相違を示してゐるのである。

この様に麗紀の記事が斷層的に一變してゐると云ふことは、高句麗史の研究に當つて先づ以て吾人の注意して置かねばならぬ緊要事である。然らばかゝる記事内容の斷層的變化は一體如何に解すべきであらうか。今假りにそこに高句麗史上の顯著な事實、例へば美川王代に高句麗國家が飛躍的變化を遂げたと云ふ様な事實を反映せるものであるとすれば、この記事上の斷層的現象は高句麗史の本質にかゝはるものとして至大の價值を持つものであるが、若し又それが單なる麗紀撰述上の何らかの事情に歸因するものとするならば、それは史料の有無と云ふやうなことに原因すると解さるべきであらう。一とわたり考へて見たゞけでも、高句麗の歴史自體が美川王代にそのやうな斷層的飛躍を敢へてする筈もないから、理由は後者即ち何かの事情で美川王十二年以後の高句麗側の史料が失はれたものと推定するより外はない。そこでこの問題を今少し詳細に參考する爲に、甚だ煩はしいことだが、一例として美川王十二年から廣開土王の末年に至るまでの六代間の麗紀の記事を點檢して見よう。

美川王十二年秋月、遣將襲取遼東西安平、

(梁書、高句麗傳)

十四年冬十月、侵染浪郡、虜獲男女二千餘口、

(資治通鑑、晉紀)

十五年正月、立王子斯由爲太子、秋九月、南侵帶方郡、

十六年春二月、攻破玄菟城、殺獲甚衆、秋八月、星孛于東北、

(晉書、元帝紀、剛通鑑、晉紀)

二十年冬十二月、晉平州刺史崔慈來奔(以下二百二十七字晉書より引用の分省略)

二十年冬十二月、遣兵寇遼東、慕容仁拒戰破之、

三十一年、遣使後趙石勒、致其格矢、

三十二年春二月、王薨、葬於美川之原、號曰美川王、

故國原王一云國阿上王諱斯由或云釗美川王十五年、立爲太子、三十二年春、王薨、即位、

二年春二月、王如卒本、祀始祖廟、巡問百姓老病賑給、三月、至自卒本、

四年秋八月、增築平壤城、冬十二月、無雪、

五年春正月、築國北新城、秋七月、隕霜殺穀、

六年春三月、大星流西北、遣使如晉貢方物、

九年、燕王皝來侵、兵及新城、王乞盟、乃還、

十年、王遣世子、朝於燕王皝、

十二年春二月、修葺丸都城、又築國內城、秋八月、移丸都城、冬十月、燕王皝遷都龍城、以下三百六十字晉紀より引用の

部分省略)

十三年春二月、王遣其臣弟稱臣入朝於燕、貢珍異以千數、燕王皝乃還其父尸、猶留其母爲質、秋七月、移居平壤東黃城、城

在今西京東木覓山中、遣使如晉朝貢、冬十一月、雪五尺、

十五年冬十月、燕王皝使慕容恪來攻、拔南蘇、置戍而還、

十九年、王送前東夷護軍宋晃于燕、燕王皝赦之、更名曰活、拜爲中尉、

二十五年春正月、立王子丘夫爲王太子、冬十二月、王遣使詣燕納質修貢、以請其母、燕王皝許之、遣殿中將軍刀龍送母周氏歸國、

以王爲征東大將軍營州刺史、封樂浪公、王如故、

三十九年秋九月、王以兵二萬南伐百濟、戰於雉城、敗績、

四十年、秦王猛伐燕破之、燕太傅慕容評來奔、王執送於秦、

四十一年冬十月、百濟王率兵三萬來攻平壤城、王出師拒之、爲流矢所中、是月二十三日薨、葬于故國之原、百濟蓋鹵王表魏曰、

小獸林王云小解朱留王諱丘夫、故國原王之子也、身長大有雄略、故國原王二十五年、立爲太子、四十一年王薨、太子即位

二年夏六月、秦王苻堅遣使及浮屠順道、送佛像經文、王遣使廻謝、以貢方物、立太學、教育子弟、

三年、始頒律令、

四年、僧阿道來、

五年春二月、始創肖門寺、以置順道、又創伊弗蘭寺、以置阿道、此海東佛法之始、（濟紀、近仇首王元年）秋七月、攻百濟水谷城、

六年冬十一月、侵百濟北鄙、

七年冬十月、無雪、雷、民疫、百濟將兵三萬、來侵平壤城、十一月、南伐百濟、（濟紀、同文）遣使入苻秦朝貢、

八年、旱、民饑相食、秋九月、契丹犯北邊、陷八部落

十三年秋九月、星孛于西北、

十四年冬十一月、王薨、葬於小獸林、號爲小獸林王、

故國壤王、諱伊連或云、於只支、小獸林王之弟也、小獸林王在位十四年薨、無嗣、弟伊連卽即位、

二年夏六月、王出兵四萬襲遼東、先是燕王垂命帶方王佐、鎮龍城、佐聞我軍襲遼東、遣司馬郝景將兵救之、我軍擊敗之、遂陷遼東、

玄菟、遼男女一萬口而還、冬十一月、燕慕容皝將兵來侵復、遼東玄菟二郡、初幽冀流民多來投、農以范陽龐淵爲遼東太守招撫之、

十二月地震、

三年春正月、立王子談德爲太子、(晉紀、廢斯王二年條上同文)秋八月、王發兵南伐百濟、冬十月、桃季華、牛生馬八足二尾、

五年夏四月、大旱、秋八月蝗、

六年春、饑、人相食、王發倉賑給、(晉紀、廢斯王五年條上同文)秋九月、百濟來侵、掠南鄙部落而歸、

七年秋九月、百濟遣達率眞嘉謨攻破都押城、虜二百人以歸、(晉紀、廢斯王六年)

九年春、遣使新羅修好、羅王遣姪實聖爲質、三月、下敕崇信佛法求福、命有司立國社修宗廟、夏五月、王薨、葬於故

國壤、號爲故國壤王、

廣開土王、諱談德、故國壤王之子、生而雄偉、有周儻之士、故國壤王三年、立爲太子、九年王薨、太子卽位、(晉紀、廢斯王八年)秋七月、

南伐百濟拔十城、九月、北伐契丹、虜男女五百口、又招諭本國陷沒民口一萬而歸、冬十月、攻陷百濟關彌城、其城

四面峭絕、海水環繞、王分軍七道、攻擊二十乃拔、

二年秋八月、百濟侵南邊、命將拒之、創九寺於平壤、(晉紀、阿華王二年)

三年秋七月、百濟來侵、王率精騎五千逆擊敗之、餘寇夜走、八月、築國南七城、以備百濟之寇、

四年秋八月、王與百濟戰於浪水之上、大敗之、虜獲八千餘級、(晉紀、阿華王四年)

九年春正月、王遣使入燕朝貢、二月燕王盛以我王禮慢、自將兵三萬襲之、以驃騎大將軍慕容熙爲前鋒、拔新城南蘇二城、拓地七

百餘里、徙五千餘戶而還、

十一年、王遣兵攻宿軍、燕平州刺史慕容歸棄城走、(通鑑、晉紀)

十三年冬十一月、出師侵燕、(通鑑、晉紀)

十四年春正月、燕王熙來攻遼東城、且陷、熙命將士母得先登、俟剗平其城、朕與皇后乘輿而入、由是城中得嚴備、卒不克而還、

十五年秋七月、蝗、旱、冬十二月、

(通鑑、晉紀、晉書、段嘉容傳)
燕王熙襲契丹至陞北、畏契丹之衆欲還、

遂棄輜重、輕兵襲我、燕軍行三千餘里、士馬疲凍

死者屬路、攻我木底城、不克而還、十六年春二月、增修宮闕、

十七年春三月、遣使北燕、

(通鑑、晉紀)
且叙宗族、北燕王雲遣侍御史李報之、雲祖父高和句麗之支、自云高陽氏之苗裔、故以高爲氏焉、慕容寶

之爲太子、雲以武藝侍東宮、寶子之、賜姓慕容氏、

十八年夏四月、立王子巨連爲太子、秋七月、築國東禿山等六城、移平壤民戶、八月、王南巡、

二十二年冬十月、王薨、號爲廣開土王、

右の記事中8ポイント活字を用ひた部分は明瞭に國外史料、主として『資治通鑑』『晉書』などによつたことが知られるもの、及び半島側に於ける國外史料すなはち『三國史記』の羅紀及び濟紀の記事から要約的に成文されたものである(その一々の典據は右肩に註記し、且側線を付した部分である)。なほその内には羅紀或は濟紀と麗紀とが類同してゐて何れの記事が原であるか不明なものが多い。これらを取去つた部分が高句麗側の史料に基くものと推定されるが、そこから天文氣象に關する記事、民疫年穀に關する記事、奇瑞的事象の類の記事などを取去つて見ると愈々その量を減じて來る。一步進めて嚴密に批判するならば、例へば故國原王十二年の丸都城の修葺及び同城に移るとある記事は、その次に引用されてゐる『資治通鑑』晉紀の丸都城陷落のことと彼此併せ考へると、その伏線の記事として假作されたものと推定してよからう。がかうした穿鑿を一々なすことは止めて更に中心問題を進めて行かう。

美川王から廣開土王に至る麗紀の記事に見られた上述の如き事情は、長壽王以後に於ては益々顯著になつて來、以て高句麗側の史料の愈々缺乏してゐたことを示してゐる。即ち中國文獻によつた部分及び天文・厄災・年穀・奇瑞な

どの記事を除くと、長壽王以後の麗紀の記事にして残り得るものは僅かに次の如きものとなる。

長壽王、諱巨連一作連開土王之千子也、體貌魁傑、志氣豪邁、開土王十八年、立爲太子、二十二年王薨、卽位、

十二年春二月、新羅遣使修聘、王勞慰之特厚、
(麗紀、訥祗麻立千八年條と同じ)

十三年、遣使如魏貢、

この王代の魏に朝貢する記事は前後約四十回に及んで居り、すべて『魏書』より轉載したものである。故にこの十三年の記事と次の二十七年の記事のみ『魏書』と符合しない。ところが後者は『宋書』文帝紀元嘉十六年の高麗入貢事記による誤記であり、従つて前者も何かの誤記であらう。

十五年、移都平壤、

二十七年……十二月、遣使入魏朝貢、
(羅紀、訥祗麻立千三十八年條と同じ)

四十二年秋七月、遣兵侵新羅北邊、
(羅紀、慈悲麻立千十一年と同じ)

五十六年春二月、王以靺鞨兵一萬、攻取新羅悉直州城、
(高麗王十五年條と同じ)

五十七年……秋八月、百濟兵侵入南鄙、
(羅紀、蓋國王十五年條と同じ)

七十九年……冬十二月王薨、年九十八歲、號長壽王、
(魏書、高祖紀)

文咨明王一云明、治好王諱羅雲、長壽王之孫、父王子古鄒大加助多、助多早死、長壽王養於宮中、以爲大孫、長壽在位七十

九年薨、繼立、

三年……二月、扶餘王及妻孥以國來降、

五年、齊帝進王爲車騎將軍、

七年春正月、立王子興安爲太子、秋七月、創金剛寺、

十一年……十二月、遣使入魏朝貢、

十五年秋八月、王獵於龍山之陽、五日而還……冬十一月、遣將伐百濟、大雪、士卒凍斃而還、

十六年……

（高麗、武寧王七年條下同）
王遣將高老與靺鞨謀、

欲攻百濟漢城、進屯於橫岳下、百濟出師逆戰乃退、

二十八年、王薨、號爲文咨明王、

安臧王、諱興安、文咨明王之長子、文咨在位七年立爲太子、二十八年、王薨、太子卽位、

二年……秋九月、入梁朝貢、

三年夏四月、王幸卒本、祀始祖廟、五月、王至自卒本、所經州邑貧乏者賜穀人一斛、

十一年春三月、王畋於黃城之東、

十三年夏五月、王薨、號爲安臧王、

是梁中大通三年、魏普泰元年也、梁書云、安臧王在位第八年普通七年卒、誤也

安原王、諱寶延、安臧王之弟也、身長七尺五寸、有大量、安臧愛友之、安臧在位十三年薨、無嗣子、

三年春正月、立王子平成爲太子、二月、遣使入魏朝貢、

十五年春三月、王薨、號爲安原王、

是梁大同十一年、東魏武帝三年也、梁書云、安原以大清二年卒、以其子爲寧東將軍高句麗王樂浪公、誤也

陽原王、或云陽崗上好王諱平成、安原王長子、生而聰慧、及壯雄豪過人、以安原在位三年立爲太子、至十五年王薨、太子卽

位、

三年秋七月、改築白巖城、葺新城、

七年……秋九月、突厥來圍新城、不克、移攻白巖城、王遣將軍高紇領兵一萬拒克之、殺獲一千餘級、

八年、築長安城、

十三年夏四月、立王子陽成爲太子、遂宴羣臣於內殿、冬十月、丸都城干朱理叛伏誅、

十五年春三月、王薨、號爲陽原王、

平原王或云平崗上好王諱陽成、隋唐書作湯陽原王長子、有膂力、善騎射、陽原王在位十三年、立爲太子、十五年王薨、太子卽位、

二年春二月、……王幸卒本、祀始祖廟、三月、王至自卒本、所經州郡獄囚除二死皆原之、

七年春正月、立王子元爲太子、

十三年秋七月、王敗於洧水之原、五旬而返、八月重修宮室、蝗、旱、罷役、

二十五年……二月、下令減不急之事、發使郡邑勸農桑、

二十六年春、遣使入隋朝貢、

二十八年、移都長安、

三十二年……王在位三十二年、冬十月、薨、號曰平原王是開皇十年、隋書及通鑑書高祖賜璽書於開皇十七年、誤也

嬰陽王一云平陽諱元一云大元平原王長子也、風神俊爽、以濟世安民自任、平原王在位七年立爲太子、三十二年王薨、太子卽

位、

十一年春正月、……詔大學博士李文真、約古史、爲新集五卷、國初始用文字時、有人記事一百卷、名曰留記、至是

刪修、

十四年、王遣將軍高勝攻新羅北漢山城、羅王率兵過漢水、城中鼓噪相應、勝以彼衆我寡、恐不克而退、

十八年……夏五月、遣師攻百濟松山城不下、移襲石頭城、虜男女三千而還、

(隋紀、武王八年條と同文)

(續紀、眞平王三十年條と同文)

十九年春二月、命將襲新羅北境、虜獲八千人、夏四月、拔新羅牛鳴山城、

二十九年秋九月、王薨、號曰嬰陽王、

榮留王、(留附也) 諱建武一云 嬰陽王異母弟也、嬰陽在位二十九年薨、卽位、

二年……夏四月、王幸卒本、祀始祖廟、五月、王至自卒本、

二十五年、春正月、王命西部大人蓋蘇文監長城之役、冬十月、(留附也、高麗傳及通鑑に依る) 蓋蘇文弑王、十一月、太宗聞王死、舉哀於苑中、詔贈物三

百段、遣使持節弔祭、

(寶臧)王諱臧或云寶臧以失國故無諡、建武王弟大陽王之子也、建武王在位二十五年蓋蘇文弑之、立臧繼位、

二年春正月、封父爲王、……三月、蘇文告王曰、三教譬如鼎足、闕一不可、今儒釋並興、而道教未盛、非所謂備天

下之道術者也、伏請遣使於唐、求道教以訓國人、大王深然之、奉表陳請、太宗遣道士叔過等八人、兼賜老子道德經、

王喜、取僧寺館之、

論曰……(略)……、

五年……夏五月……東明王每塑像泣血三日、

論曰……(略)……、

九年夏六月、盤龍寺普德和尚以國家奉道、不信佛法、南移完山孤大山、

十三年夏四月、人或言、於馬嶺上見神人、曰、汝君臣奢侈無度、敗亡無日、

以上摘出したところは麗紀の長壽王代以下全文の約二十分の一の量に該當し、これによつて麗紀の後半部が如何に國內的史料に缺けてゐたかを窺ひ得ると共に、例へば治世七十九年の長さに亘り、且高句麗歷代中最も國家的發展を

示した長壽王代の國內史料による記事が、右の如く貧弱であつたことは全く驚くより外はない。また高句麗末期の如く高句麗史としては最も新しい時代に屬する部分がこれ又殆ど外部的史料にのみよつてゐることは愈々以て不可解の感を深くせざるを得ない。

今假に高句麗史を麗紀の記事の史料的性質によつて區分するとすれば、美川王十二年を堺として、その後半を國內史料的には缺史時代と呼んでも敢へて過言ではあるまい。勿論この區分は高句麗史の事實そのものに基いたものではなく、麗紀記事の史料的性質によつての區分ではあるが、少くとも麗紀によつて高句麗史を學ぶ限り、右の區分は心に留めて置く必要がある。而してこの前後二部の區分によつて高句麗史を考究することは、高句麗の歴史的事實そのものに關するのではなく、高句麗本紀と云ふ一個の編纂物の理解と批判とに役立つ方法と云ひ得るであらう。こゝに於て先づ麗紀のこの斷層的現象を如何に解釋すべきか、最初の問題となつて來る。即ち問題は、(イ)麗紀或はその原典の撰述の際、高句麗側の國內史料が後半期に限つて殊更に闕如してゐたのか、それとも(ロ)後半期にのみ史料が闕如してゐたのではないが、何か編纂上の都合で後半部には餘り使用されなかつたのか、の二者何れかにあるであらう。

若し(イ)の場合であつたとすれば、美川王十二年以後の後半期における史料の闕如が充分に解明されるだけの理由が発見されねばならぬ。古きに屬する麗紀の前半に比し、新しい時代の後半の史料が却つて著しく缺如してゐると云ふことは、普通の史料殘存率とは全く正反對であり、一般論的には甚だ理解し難い奇異な現象であり、従つてそれには何か特殊な事情があつたに違いない。然らば一體この美川王代とは如何なる時代か。そこに右の疑問に答へる充分なる理由が発見せられるであらうか。さて美川王の即位に當つて王位繼承の争ひがあつたが、さうした事件は高句

麗史上通有なことであつて殊更にこの王代を特色づけるものではない。そこで今一つ考へに上ることは、この王代の重大な出來事として同王の十四年に樂浪郡を亡ぼしたと云ふ事件である。これは確かに半島史上特筆大書すべき重大事件と云へる。その前後の麗紀の記事を既掲の分も併せて今一度讀んで見よう。

三年秋九月、王率兵三萬侵玄菟郡、虜獲八千人、移之平壤、

十二年秋八月、遣將襲取遼東西安平、

十四年冬十月、侵樂浪郡、虜獲男女二千餘口、

右の記事中十四年の「侵樂浪郡」は『資治通鑑』晉紀十孝愍上の

建興元年、遼東張統據樂浪帶方二郡、與高句麗王乙弗利相攻、連年不解、樂浪王遼、說統帥其民千餘家歸虜、虜爲之置樂郡以統爲太守、遼參軍事、

によつたものであり、それにつゞく虜獲云云の數字も文章の勢ひで假作したものであらう。この十四年に先立つこと十一ヶ年前の美川王三年の條に平壤に玄菟郡の虜八千を移したことが見え、これが根據あるものとすれば、時既に樂浪の地が高句麗の支配下にあつたらしく推定され、右の『資治通鑑』の建興元年（美川王十四年）の記事と一見矛盾するが如くであるが、建興元年は慕容廆が遼東に樂浪郡を名義的に移置したことに加ふる年次と解すべきであり、樂浪郡の實際的な滅亡は寧ろ建興元年より若干以前にあつたと考へられるから、麗紀美川王三年の記事はこれと必ずしも矛盾するものではない。否寧ろ樂浪郡の滅亡は建興元年より若干年以前であつたことを示唆する高句麗側の史料として注意すべきであらう。爾來年と共に平壤方面が重きを加へて來たことは左の記事（後文參照）を再讀すれば了解されよう。

故國原王四年秋八月、増築平壤城、

同、十三年……秋七月、移居平壤東黃城 云云、

同、四十一年冬十月、百濟王率兵三萬來攻平壤城、王出師拒之、爲流矢所中、是月二十三日薨、

小獸林王七年冬十月……百濟將兵三萬來侵平壤城、

永樂九年己亥(三品註、廣開土王八年)百殘違誓與倭和通、王巡下平穰、云云(好太王碑)

長壽王十五年、移都平壤、

即ち平壤城は高句麗の半島經營の要衝であり策源地ともなつたが、遂に長壽王十五年には王都をこの地に移してゐるのである。これ樂浪郡滅亡の結果に外ならぬ。

右の如く美川王の三年にしろ十四年にしろ樂浪郡を亡ぼしたと云ふことは高句麗史の一大轉換期を劃するものであり、高句麗が滿州的國家から半島國家へ移行したことを語るものと云へよう。この意味に於て該事件によつて高句麗史を二分することは歴史事實に即した時代區別ともなり得るのである。而してこれが恰も先に麗紀をその史料の性質によつて前後二部に區分したことゝ一致するのである。この一致は全くの偶然であるか、それとも何かそこに必然的な關係が存するか、少くとも一致が餘りに顯著なるが故に、さうした問題を色々の方面から考へて見る必要がある。

先づ第一に聯想されることは、高句麗が寶藏王二十七年(西紀六六八年)唐羅聯合軍の包圍攻撃によつて平壤城に於て滅亡したと云ふことである。『新唐書』によるとその陷落の情況は誠に悲慘を極め、恐らく平壤時代の諸記録はその際すべて煙滅してしまつたと云ふことは容易に考へられることであり、且又その後新羅側には高句麗王朝の歴史を編纂するだけの熱意がなかつたとすれば、平壤時代の高句麗史が缺史的な結果になつたのは無理もないことであつたと一應は

考へられよう。然しこの想定は餘り確率を持つてゐない。何故なら平壤に遷都したのは長壽王の時であり、それ以前の、こゝに問題としてゐる美川王から長壽王に至る間は古くからの王都たる國內城（丸都）に都してゐたのであるから、右の想定は長壽王以前美川王に至る間の高句麗側の史料の缺如を説明し得ないであらう。

がこゝに今一つの顯著な別の事實に氣付くのである。それは樂浪郡滅亡の時期を契機として、それ以後は中國側の高句麗關係の史料が劃期的に増加してゐると云ふことであつて、その豊富さは支那側の史料のみを以てしても或程度高句麗史が撰述出来る程であると云つても過言であるまい。これに反して樂浪郡滅亡以前の時期に於ては、中國側の高句麗關係の史料はところどころ散見する程度で、後半期とは全く比較にならない。このことは樂浪郡の滅亡によつて、それまで半島方面の事務を司つてゐた郡の史料が煙滅したこと、及び一方郡を亡ぼしてからの高句麗は年と共に強大化し、支那方面との關係がその頻度を増したことなどが、樂浪郡の滅亡を契機として中國側の史料を量的に前後對稱的ならしめたものではあるまいか。その理由は兎に角も、美川王以前は中國側史料が貧弱であり、以後は劃期的に豊富であると云ふことは、甚だ明瞭な事實である。このやうに美川王代を中心として高句麗側史料と中國側史料とが量的に反比例して増減してゐると云ふ兩者の關係には何か理由が存するのではなからうか。少くとも偶然とするには餘りにその比例的關係が顯著でありすぎる。こゝに於て第二の想定を試みることにしよう。即ち麗紀或はその典據となつた高句麗史籍類の撰述に當つて、美川王以後に於ては國外史料のみによつても高句麗史を作り得る程に外部的材料が豊富であつたことは、編纂者にとつてはこの上もない好都合であつたに違ひない。恐らくこのことが美川王以後の麗紀或はその原典撰述に當り、撰者をして主として外部史料に依らしめたものではあるまいか。而して一方では、高句麗の内部的史料は、前言した如く民族傳承的なものが多く、且この種のものはその性質上明確な紀年を持つてゐな

かつたとすれば、編年形式の史籍にとつては何處へでも持つて行かれると云ふ自由さと便利さがあり、従つてさうした類の内部的史料は、外部的史料の乏しい前半部に廻されたものではあるまいか。そればかりでなく、一國の歴史の古代なるものは、精神的に常に現實と結び付く性質を持つものなるが故に、後代の傳承的史料を引付ける傾向が強く、このことが上記の編纂傾向を助成したことも考へられる。若しこの想定が許容せられるならば、麗紀の前半部に於ては内部的な傳承史料が主として使用せられ、後半部に於ては豊富な紀年的に明確な外部史料が使用されたと云ふこと、換言すれば後半部に當る時代に支那側の史料が豊富であつたと云ふ事實と、麗紀撰述の遣り方とに基いて上述の如き麗紀の斷層的現象が生じたものとして理解せられるのではあるまいか。

第二項 麗紀後半に使用された高句麗側の史料

麗紀後半部に於ける『内部史料』によつて書かれたと推定される記事を點檢するに、その最も整つてゐるのは、王の即位、その系譜的説明及び薨去に關する記事である。なほこれに附加的なものとして、王の卒本始祖廟に於ける親祭及び立太子の記事であるが、その内、立太子の記事は歴史的記錄に基いたものと云ふよりも、撰者の推定した記事と云ふ感が特に深い。が少くとも麗紀が典據としたものには各王の即位薨去及びその系譜などが明記されてゐたことが充分に想像される。支那側の史料にも高句麗王名及びその即位薨去に關する記事は散見してゐるけれども、麗紀は獨自の史料によつてそれを明記し、支那側史料に對しては寧ろ批判的な態度を以つて臨んでゐるのである。具體的な例によつてそれを概説して見よう。

第十五代美川王

三國史記高句麗本紀の原典批判

麗紀の在位——西紀三〇〇年——三三一年。

『梁書』高句麗傳に「三〇七—三二二年晉永嘉亂、……句麗王乙弗利、頻寇遼東云云」とあり、句麗王乙弗利が三〇七—三二二年の頃まで晉と交渉を持つたことだけが分明するに過ぎない。

第十六代故國原王

麗紀の在位——三三一——三七一年。

『資治通鑑』晉紀に「(三三九年)咸康五年……高句麗王乞盟。」同書に「(三五五年)永和十一年十二月、高句麗王釗遣使詣燕云云」とあり、釗在位の知られるのは三三九——三五五年間である。

第十七代小獸林王

麗紀の在位——三七一——三八四年。

第十八代故國壤王

麗紀の在位——三八四——三九二年。

第十九代廣開土王

麗紀の在位——三九二——四一三年。

『梁書』に「垂死、子寶立、以ニ句麗王安一爲ニ平州牧一、封ニ遼東帶方二國王一」とあり、慕容垂死し子寶が後を繼いだのは太元二十一年西紀三九六年である。又『資治通鑑』晉紀に「(四〇〇年)隆安四年、高句麗王安、事レ燕禮慢云云」とあり、句麗王安の存在の知られるのは僅か三九六——四〇〇年間である。この王代のことは廣開土境好太王陵碑の發見によつて最も正確なることを知り得る王代であるが、麗紀或はその原典の撰述に當つてはこの碑文は知

られてゐなかつたやうである。該碑によれば二九登祚即ち十八歳で即位し、卅有九で晏駕したとあるから、その在位は二十二年間であり、麗紀の在位年數と一致してゐる。但し麗紀同王の元年壬辰が碑文の永樂二年に當るので、即位建元と考へ麗紀即位の年を一年繰上ぐ可しとの説があるが、今西龍博士は麗紀の記事を肯定し、必ずしも即位建元と見るの要なきを主張されてゐる。^③

第二十代長壽王

羅紀の在位——四一三——四九一年。

『宋書』高句麗傳に「高句麗王高璉、晉安帝義熙九年、遣長史高翼奉表獻赭白馬、以使持節……樂浪

公」とあり、『魏書』高句麗に「太和十五年、璉死、年百餘歲」とある。なほ麗王は『魏書』高祖紀に太和十五

年五月、及び九月に遣使朝獻して居り、十二月癸巳に高祖は麗王璉の爲に城東行宮に哀を擧げてゐるから、王の死は秋から年末にかけてであらう。麗紀が「冬十二月王薨」としてゐるのは『魏書』によつたらしく考へられる（文咨王の條參照）。同王の在位年次が麗紀と『魏書』とで一致して居り、このことは後者によつて長壽王の治世がすべて明瞭であるところから麗紀がそれによつたのではないかと一應は考へさせるのである。

第二十一代文咨明王

麗紀の在位——四九二——五一九年在位。

（四九二年）

『魏書』高祖紀に「太和十六年三月辛巳、以高句麗王璉孫雲爲其國王」とある。又『梁書』高句麗傳に「天

監十七年、雲死、子安立、」『魏書』肅宗紀に「神龜二年、高句麗王雲死、以世子安爲其國王、」『資治通鑑』

梁紀に「天監十八年、是年、高句麗王雲卒、世子安立、」とあり、『梁書』は雲の死を天監十七年としてゐるが、

他の二書によつて同十八年に訂正すべきであらう。支那側史料による在位年次は麗紀と一致する。がこゝに一應考へて見なければならぬ問題がある。即ち麗紀は前王長壽王の薨去と同時に即位した文咨王に關して、翌年を以て同王の元年とし、麗紀の一般の算へ方と相違してゐる。恐らく『魏書』高祖紀に「十二月癸巳、帝爲高麗王璉、舉哀於城東行宮」とあるところから、璉（長壽王）の死を十二月とし、踰月稱元の法に従つて次代文咨王の元年を翌年としたのであらう。しかし魏廷に於て璉の死の報知を受けて魏帝が哀を擧げたのは十二月の癸巳即ち六日であるから、長壽王の死は十一月であつたと見なくてはならぬ。これらの點を考へれば、麗紀が中國側史料によつて原典を修正したものと云つてよからう。

第二十二代安臧王

麗紀の在位——五一九——五三一年。

前掲の如く安の即位は五一九年であるが、その薨年は諸書一致しない。『梁書』（高句麗傳）には「普通七年安卒、子延立、」とあり、又『冊府元龜』外臣部に「西魏孝武永熙元年、^{（五三二年）}高句麗延、爲使持節……高句麗王」とあるから、當時の封冊例より推して新麗王の即位はその前年即ち五三一年であつたと推定せられる。この點麗紀と一致する。なほ麗紀は安臧王薨の條に「梁書云、安臧王第八年普通七年卒、誤也、」と指摘してゐるのは自らの史料を堅持せる態度と云ふべきであらう。

第二十三代安原王

麗紀の在位——五一三——五四五年。

前條によつて安原王の即位は五一三年である。沒年に關しては異説がある。即ち『梁書』武帝紀に「太清二年三月^{（五四八年）}

甲辰、撫東將軍高句麗王高延卒、以_ニ其息_一爲_ニ寧東將軍高麗王樂浪公_一、同書高句麗傳に「太清二年、延卒、詔以_ニ其子_一襲_ニ延爵位_一、」とあるが、一方『周書』高麗傳には「璉五世孫成、大統十二年遣使獻_ニ其方物_一」とあり、從つて新王成の卽位は五四六年以前でなくてはならぬ。今假にその前年とすれば麗紀と一致する。なほ『梁書』武帝紀の太清二年三月甲辰は後半部の封冊の年時であり、封冊の理由として高延卒の記事を挿入したのであつて、同書高句麗傳はそれを誤解して太清二年延卒としたのではあるまいか。さうだとすれば『梁書』によると延の没年は五四八年以前となり、『周書』によると五四六年に次代の新王が立つてゐるのである。麗紀は安原王薨ずの條で『梁書』のこの記事を誤也と評し、自らの史料によつて訂正してゐる。

第二十四代陽原王

麗紀の在位——五四五——五五九年。

『北齊書』帝紀第五廢帝に「乾明元年_(五九〇年)二月戊申、以_ニ高麗王世子湯_一、爲_ニ使持節領東夷校尉遼東郡公高麗王_一とあり、冊封の前年を新王卽位の年と見れば陽原王の没年は麗紀と一致する。

第二十五代平原王

麗紀の在位——五五九——五九〇年。

『隋書』高祖紀に「開皇十年七月辛亥、高麗遼東郡公高陽卒、」とあり、麗紀と一致する。

第二十六代嬰陽王

麗紀の在位——五九〇——六一八年。

『冊府元龜』に「開皇十年七月、高麗遼東郡公高湯卒、拜_ニ其子元_一、爲_ニ開府儀同三司_一、襲_ニ爵遼東郡公_一、……策

「元爲王」とある。高麗王元の名の最後に見えるのは『資治通鑑』隋紀大業十年(六四四年)秋七月の條である。且没年は不明である。

第二十七代榮留王

麗紀の在位——六一八——六四二年。

『資治通鑑』唐紀に「武德四年七月乙丑、高句麗王建武遣使入貢、建武元之弟也、」とあり、又「貞觀十六年十一月丁巳、營州都督張儉奏高麗東部大人泉蓋蘇文弑其王武……立王弟子藏爲王、」とある。従つて同王に就いて知り得る在位年は六二一——六四二年間である。

第二十八代寶臧王

麗紀の在位——六四二年——六六八年。

『資治通鑑』に「總章元年……九月癸巳、李勣拔平壤……高麗王藏遣泉男產、帥首領……降、」とあり、寶臧王の在位は六四二——六六八年間で、麗紀と一致する。

以上考證するところを總括して圖示すると次表の如くである。

以上概説するところによつて、麗紀後半部に於ける高句麗側史料には、王の即位、薨去の年次及びその系譜に關しては整つたものが存したことを具體的に窺知し得た。即ち美川・故國原・小獸林・廣開土・安原・嬰陽・榮留の諸王に就ては、即位薨去の年次乃至はその何れか一方は、中國側史料には明示されてゐないところであり、従つて麗紀或はその原典は自らの獨自の史料に基いて王曆を作製したものであり、且自らの史料に價値を認めてゐたことは、安臧王の薨去年月及び安原王の薨去年月に關して『梁書』の記事の誤謬なるを指摘してゐるところからも窺はれる。而し

(高句麗側史料に依る)

美王(乙弗、曷) 300AD.
故國原王(斯田、釗) 331AD.
小獸林王(丘夫、大) 371AD.
故國壤(伊連) 384AD.
廬闌土王 392AD.
(談德) 413AD.
長壽王(巨連、璵) 491AD.

(中國側史料に依る)

307AD. (乙弗利)
312AD.
339AD. (釗)
349AD.
396AD. (安)
413AD.
(高璵)
491AD.

文咨明王(羅、喜) 519AD.
興安王 531AD.
安寶王 545AD.
延王 559AD.
(平原王) 590AD.
(陽成) 590AD.
嬰陽王 (元、大元)
(榮留王) (建武) 618AD.
(寶藏王) 642AD.
668AD.

(雲) 519AD. (安)
531AD. (高延)
546AD. (成)
559AD. (高陽)
(湯) 590AD. (元)
614AD. (建武) (武)
621AD. (璵)
642AD. 668AD.

て麗紀の各王の治世年月に關する記事と中國側史料とが一致する點多く、長壽・文咨・安藏・安原・陽原・平原・嬰陽・榮留・寶藏の諸王の即位薨去の年次乃至はその何れか一方に於て兩者が一致してゐるのである。獨立の記載がかくも一致してゐることは、麗紀のそれが如何に信賴し得るに足るかを語るものである。たゞ麗紀が中國側史料に調子

を合せたのではないかと云ふ疑問が起るかも知れないが、然しさうした疑問は前掲の考證によつて解消されるであらう。たゞ文咨王の即位年月に就いてのみ麗紀は中國側史料によつて自らの史料を修正して一年繰下げてゐる疑ひがあるに過ぎない。

然らばかく信頼し得る麗紀の史料文獻は如何なるものであつたらうか。王の即位、薨去、系譜以外に關する麗紀の記事に眼を轉ずるならば、甚だしくその内容は貧弱となる。

先づ外交關係に就いて見るに、外部史料から來たことを原典批判によつて摘出し得なかつたものは、中國（樂浪及び遼東）關係の記事では美川王十五年及び十六年の各條、對百濟關係に就いては廣開土王即位の年、同王三年、文咨王十五年の三條、對新羅關係では嬰陽王十四年の條、扶餘王來降に關する文咨王三年の條、突厥來攻に關する陽原王七年の條である。麗紀後半記事の全九割を占めてゐる對外關係記事の内、それは右の如く十ヶ條足らずであり、全く九牛の一毛とも評すべきである。右の内には筆者の管見よく考證摘出し得なかつたものも少くなくからうから、その條數は尙一層減少するべく、従つてこの部分の高句麗側の史料は殆どなかつたと云つても過言ではあるまい。今試みに廣開土王代の絶對的史料とも云ふべき同王陵碑をとつて、麗紀の同王代の高句麗側對外關係史料と比較すれば次表の如くである。

廣開土王年次	麗紀	王碑文
元年 壬辰	百濟關彌城を攻略す	
三年 甲午	百濟來攻、之を敗る、國南七城を造る	
四年 乙未（永樂五年）		遼東方面（或は南鮮か）征討

五年 丙申 (同 六年)		科山國政伐、中朝鮮諸城攻略
七年 戊戌 (同 八年)		新羅方面遠征
八年 己亥 (同 九年)		平壤へ南巡
九年 庚子 (同 十年)		任那加羅方面へ出撃、日本と合戦
十三年 甲辰 (同 十四年)		帶方界方面に於ける日本との合戦
十六年 丁未 (同 十七年)		日本との合戦
十八年 己酉 (同 十九年)	國東禿山等六城を築く、王南巡す	
十九年 庚戌 (同 二十年)		東夫餘征伐、諸城攻略

この表が示す如く、麗紀の記事は王碑文とは全く一致しないのであつて、この點からも甚だしく信頼するに足らないことを窺ひ得る。爾餘の王代には廣開土王碑の如き規準となるべき絶對的比較資料が缺けてゐるから、麗紀の高句麗側史料を一々批判し得ないが、この一斑を以て他を推すことが出來はしないか。

次に築城關係の記事である。故國原王四年の「増築平壤城」の記事を始め數條近く散見する。これらの内には、既に指摘した如く、故國原王十二年の丸都城の修葺の記事は『資治通鑑』晉紀の燕軍の丸都城攻略の伏線として假作されたものであり、外にもこの種のものがあるかも知れない。

次に國內問題に關する記事であるが、最も大切なものとして遷都記事である。即ち長壽王十五年の「移都平壤」及び平原王二十八年の「移都長安城」の二者である。この二者と併せ考へられるのは、麗紀前半に於て王都關係の記事が所々に見えてゐること、これから推して、概して麗紀は王都に關しては少からざる關心を示してゐるのであ

る。果してそれには然るべき典據が存したのであらうか。『三國史記』雜誌第六地理四高句麗の條に王都の變遷を述べる。『都國內』、歷四百二十五年、長壽王十五年、移都平城、歷一百五十六年、平原王二十八年、移都長安城、歷八十三年、寶臧王二十七年而滅、とその一々の年數を記し、且次の如く注してゐる。

古人記錄、自始祖朱蒙王寶臧王歷年、丁寧、織、悉、若、此、而或云、故國原王十年、移居平壤東黃城、城在今西京東木覓山中、不可知其然否、

これによれば、始祖王以來の王都に關しては詳細な古人の記錄が存し、特にそれが參照されたことを知り得るのである。その外にも同志は、「而古記云、自平壤移長安」と古記を引用してゐる。なほ長安城に就いては、『東國輿地勝覽』卷之五十一平壤の條に、「在大城山東北、土築、……城中有安鶴宮古址」と考證してゐる。勿論『隋書』高麗傳には「都於平壤城、亦曰長安城」とあり、平壤城即長安城になつてゐるが、高句麗の都城の制よりすれば、この二城は地域的には別であつて、長安城は平壤城の山城——戰時の退避城——であつたと解してよからう。國內記事の甚だしく貧弱な麗紀後半に於て王都關係のことがかくの如く明確に記載されてゐるのは、想ふに、その史料となすべき古記錄が存したからであつたと解すべきである。

政治的事件としては、唯一つ陽原王十三年の丸都城干朱理の叛亂の記事があるに過ぎない。美川王以前の麗記には叛亂關係の記事が頻出し、高句麗史の顯著な一特徴をなしてゐるが、麗紀後半部には只この記事一つであると云ふことは、如何にこの種の史料が缺乏してゐたかを示すものであり、何か偶然にこれだけが傳へられてゐたのであらう。次に小獸林王二年の「立太學、教育子弟」及び三年の「始頒律令」の二條は文化關係記事として注意すべきであるが、眞ちには信じ難い感を與へる。文化關係記事の内、最も詳しく且その頻度も多いのは佛教關係の記事であ

る。麗紀後半に於ける比較的多くの内容を持つ記事としては、この種のもののみであると言つても過言であるまい。佛教關係の記事は、小獸林王二年、同王四年、同王五年、故國壤王九年、廣開土王二年、文咨王七年、寶臧王九年の諸條であり、これに準ずるものとして寶臧王二年の道教輸入の記事がある。さて小獸林王二年、四年、五年にかゝる佛教受容時代の記事は『海東高僧傳』卷一流通の條を參考して要約的に書かれたものであるが、その外にも四年五年に見える僧阿道のことは「我道和尚碑」なるものがあり、同碑が『三國史記』撰述の際に參考されたことは、羅紀法興王十五年佛教傳來の條に註して「此據金大問雞林雜傳所記書之、與韓奈麻金用行所撰我道和尚碑所錄殊異、」とそれを考證史料として使用したことを明記してゐるし、又『三國遺事』卷三原宗興法獸闢滅身の條には「我道本碑云」とて碑文を引用してゐるのである。寶臧王九年の盤龍寺普德和尚に關する記事にも充分な史料があつたと推定せられる。何故なら普德和尚のことに就いては『三國遺事』が高麗靈塔寺及び寶藏奉老・普德移庵の諸條で『僧傳』或は『本傳』（金富軾著普德和尚傳）を引用して記述し、「具如國史、餘具載本傳與僧傳」と云つてゐる。次に寶臧王二年の道教輸入に關する記事は『三國遺事』寶藏奉老の條に「又按高麗古記云」として記載してゐる文と殆ど同文であるから、『三國史記』も『三國遺事』も共に『高麗古記』なるものによつたと考へられる。以上の外故國壤王九年、廣開土王二年、文咨王七年の記事に就いては適確には典據を指摘し得ないが、平壤の九寺、及び金剛寺などの創立のことは、僧傳、寺記の類が夥しく存した麗紀撰述當時に於ては、充分な典據があつたと信じてよからう。右の如き考察の結果として、麗紀の佛教關係の記事は半島側に充分な史料があつて書かれたものであることを推知し得ると共に、このことは麗紀の文を一讀した時にその内容から推して既に豫期し得たところでもあつたのである。

最後に今一つ文化關係記事として嬰陽王十一年に古史を約して『新集五卷』なる歴史を撰述したと云ふ記事である

が、これは恐らく信頼してよいであらう。

その外、王即位の後卒本に到つて始祖廟を親祭するの記事が散見する。かうした恒例的行事のことは適宜挿入出来る記事ではあるが、それが各王に就いて常にさうであるのではなく、特定の王に關してであるから、それには何か據るがあつたかとも考へられる。『三國史記』雜誌第一祭祀高句麗のところに「古記云」として神廟の建立のことをはじめ、王の卒本に於ける祖廟親祭の年月を列記してゐるから、麗紀の記事もさうした古記によつたものと考へてよく、従つて祭祀關係を記した古記録が残つてゐたことも明らかである。この外王田獵の記事が若干見えるが問題とする程であるまい。

以上煩を厭はず、麗紀後半の高句麗側史料によると推定された記事を一々點檢論考したが、これによつて得た結論は、この期間に於ては高句麗の年代史的内容を持つ史料は殆ど存しなかつたと云ふことであり、たゞ僅か、

(イ) 王の即位、在位年數、系譜及び王都に關するもの、

(ロ) 王の祭祀に關する若干のもの、

(ハ) 佛教關係のもの、

が古記録として残つてゐたに過ぎない。その他偶然に残つてゐた二三の事件の史料が利用されてゐるが、全く云ふに足らない斷片的なものに過ぎなかつたのである。

第三項 麗紀の參考した半島側史籍及び史料

麗紀後半部の史料の貧弱であつたこと上述の如くであつたとすれば、そのことは麗紀或はその原典の撰述當時に存

した高句麗關係の史籍が如何なる内容のものであつたかをトする手掛りともならう。『三國史記』自らが參照したことを明記してゐる半島側の高句麗關係史籍としては左の如きものがある。

『海東古記』——麗紀太祖大王薨去の條に「案海東古記、高句麗國祖王高宮以後漢建武二十九癸巳即位、時年七歲、國母攝政、至孝、桓帝本初元年丙戌、遜位讓母弟遂成、云云」とて、『後漢書』の高句麗王宮に關する記事と比較し「則漢書所記與古記抵牾不直符合、豈漢書所記誤耶、」と考證してゐる。又雜志第一、祭祀高句麗條に「立其始祖仇台廟於國城、歲四祠之、」の注に「按海東古記、或云、始祖東明、或云、始祖優台、云云」と、始祖に關する異説のあつたことを指摘し、「然東明爲始祖、事迹明白、其餘不可信也」と論斷してゐる。こゝに云ふ「海東古記」とは固有名詞であつて、さうした特定の書物が存したものか、乃至は海東の古記の意味か必ずしも明白ではない。が「按海東古記、或云、始祖東明、或云、始祖優台、」と云つてゐるところよりすれば、同一書に二人の始祖が記載されてゐたとは考へられないから、この海東古記とは二種以上のものと解せられ、従つてそれは海東の古記の意味にとつた方がよくはあるまいか。それは兎に角として海東古記なるものが如何なる内容を持つてゐたものか、全く知る術もないが、右に引用考證されてゐる部分は王名、王即位年次、系譜關係などに關するものである。従つて少くとも海東古記が王曆風のものであつたことは窺知し得るが、それ以上に年代史的記事を含んでゐたか否かは分明でない。

「古人記錄」及び「古記」——『三國史記』地理志に「古人記錄」なる文獻名が一ヶ所、「古記」といふ名が一ヶ所、又祭祀志に「古記」といふ名が一ヶ所見へて居り、それらが引用されてゐる内容に就いては、既に前項で考察したが如くである。

以上は古記類が參考されたことを麗紀自らが明記してゐるところであるが、その外麗紀或はその原典が參考したと推定されるものに次の如きものがある。

『前三國史』『舊三國史』——現行の金富軾撰『三國史記』の前にあり、それが參照されたことは識者の齊しく認めてゐるところである。

『東明記』——『三國遺事』卷一、靺鞨渤海の條に引くところの書名で、高句麗始祖に關する所傳を收録したものと推定されるが、それが何時頃の撰述か、『三國史記』以前のものが不明である。

『高麗古記』——前掲考察した如くである。

なほ外に僧傳、寺記の類の存したこと前述の如くである。次に史籍の名だけ傳へられてはゐるが、麗紀撰述の際には恐らく現存しなかつたと思はれるものに、留記一百卷、新集五卷（大學博士李文眞撰）、高句麗祕記の三書がある。前二者は前掲の麗紀嬰陽王十一年の條に見え、又後者は麗紀寶臧王二十七年の『新唐書』『資治通鑑』の原文をそのまゝに引用したところに見えてゐる。後者の『高句麗祕記』は高句麗側の撰述か、唐人の撰述するところかも不明であるが、麗紀の撰者は『新唐書』などによつてその名を知つてゐたに過ぎない様である。

之を要するに麗紀撰述に當つて參考された半島側のものは『前三國史』何種類かの古記及び僧傳寺記類であつたが、果してその内高句麗時代のものか幾程あつたか、或はその大部分は新羅時代のものであり、又王氏高麗時代のものも若干含まれてゐたであらう。これらの史料によつて撰述された麗紀が、その後半部に於て上述の如き貧弱な内容のものであつたとすれば、これら史料文獻の内容も想像するに難くならう。而してこれらの半島側史料によつて麗紀の王曆風の骨子が出來、それに中國側史料が適當に填込まれたのであり、且その後半に於ては支那側史料が甚しく

豊富であつたが爲にそれを活用し、民族的な傳承史料や年次の不明瞭なものはすべて前半に廻されたのであらう。その結果半島側の史料に基く記事に就いて云へば、内容の甚だしく貧弱な後半部と、これと對照をなす前半部とに分れると云ふ斷層的な姿を示すことになつたのである。

第二節 高句麗本紀の前半部に見られる特色

第一項 對外關係記事の取扱ひ

麗紀後半部に於て見出し得た最も顯著な構成上の特徴は、對外關係記事の殆ど總てが外部史料によつてゐたと云ふことであつた。然らば這般の特徴は前半部に於ても齊しく見得るであらうか。先づ對外關係記事の内、對支關係の記事に就いて見よう。

琉璃明王三十一年、漢王莽殺我兵伐胡、(漢書、王莽傳。魏志、高句麗傳)
(以下百四十八字魏志より引用の分省略)

三十三年……秋八月、王命烏伊、摩離領兵二萬、西伐梁貊滅其國、進兵襲取漢高句麗縣(縣屬玄菟郡)

大武神王十一年秋七月、漢遼東太守將兵來伐、王會(詳か)詳臣問戰守之計、……(以下長文の故に略す——内容は尉那巖城龍城及び左輔乙豆智の計により漢兵を還えさした語である。)

十五年……四月王子好童、遊於沃沮、樂浪王崔理出行、因見之、問曰、觀君顏色、非常人、豈非北國神王之子乎、遂同歸、以女妻之、後好童還國、……(以下好童計を以て樂浪王を降す話及び彼が王位繼承の争ひの爲非命な最後を遂げる話を記す。)

十二月……遣使入漢朝貢。（後漢書、光武帝紀。同、高句麗傳）光武帝復王號、是立武八年也、

二十年、王襲樂浪滅之。^①

二十七年秋九月、（後漢書、光武帝紀）漢光武帝遣兵渡海伐樂浪、取其地爲郡縣、薩水已南屬漢、

閏中王四年冬十月、（後漢書、高句麗傳）蠶友落部大家戴升等一萬餘家、詣樂浪投漢、（後漢書云、大加戴升等萬餘口、

慕本王二年春、（後漢書、光武帝紀。同高句麗傳）遣將襲漢北平、（後漢書、和帝紀。同高句麗傳）漁陽・上谷・太原、而遼東太守蔡彤以恩信待之、乃復和親、

大祖大王五十三年春正月……王遣將入漢遼東郡、奪掠六縣、太守耿種出兵拒之、王軍大敗、秋九月、耿種擊破貊人、

五十七年春正月、（後漢書、安帝紀）遣使如漢、賀安帝加元服、

五十九年、（後漢書、高句麗傳）遣使如漢、貢獻方物、求屬玄菟、（通鑑言、是年三月、麗王宮與穢貊寇玄菟、不知或求屬或寇耶、抑一誤耶）

六十六年、（後漢書、高句麗傳）夏六月、王與穢貊襲漢玄菟、攻華麗城、

六十九年春、（後漢書、高句麗傳。同書、安帝紀）漢幽州刺史馮煥・玄菟太守姚光遼東太蔡諷等將兵來侵、擊殺穢貊渠帥、盡獲兵馬財物、王乃遣弟遂成、領兵二千餘

人、逆煥光等、……（中略）……殺獲二千餘人、夏四月、王與鮮卑八千人、往攻遼陰縣、……（中略）……死者百餘人、十二月、

王率馬韓穢貊一萬餘騎、進圍玄菟城、夫餘王遣子尉仇臺、領兵二萬、與漢兵并力拒戰、我軍大敗、

七十年、王與馬韓穢貊侵遼東、扶餘王遣兵救破之、

七十二年、冬十月遣使入漢朝貢、^②

九十四年、秋八月、（後漢書、高句麗傳）王遣將襲漢遼東西安平縣、殺帶方令、掠得樂浪太守妻子、

新大王四年、（魏志、高句麗傳。後漢書、高句麗傳）漢玄菟郡太守耿臨來侵、殺我軍數百人、王自降乞屬玄菟、

五年、王遣大加優居主簿然人等、將兵助玄菟太守公孫度、討富山賊、

八年冬十一月、漢以大兵嚮我、王問羣臣戰守孰便、衆議曰、漢兵恃衆輕我、若不出戰、彼以我爲怯數來、……（中略）……答夫曰、不然、漢國大民衆、今以強兵遠鬪、其鋒不可當也……（中略）……若我深溝高壘、清野以待之、彼

必不過旬月、饑困而歸、我以勁卒薄之、可以得志、王然之、嬰城固守、漢人攻之不克、士卒饑餓引還、答夫帥數千

騎追之、戰於坐原、漢軍大敗、匹馬不返、王悅、賜答夫坐原及質山爲食邑、

故國川王或云國襄

諱男武謨夷

新大王伯固之第二子、

伯固薨、

（魏志、高句麗傳）

國人以長子拔奇不肖、共立伊夷謨爲王、漢獻帝建安初、拔奇怨爲

兄而不得立、與消奴加各將下戸三萬餘戸、詣公孫康降、還住沸流水上、^⑤

六年、漢遼東大守興師伐、王遣王子嗣須拒之、不克、王親帥精騎、往與漢軍戰於坐原、敗之、斬首山積、

十九年、中國大亂、漢人避亂來投者甚多、是漢獻帝建安二年也、

山上王、諱延優一名位宮

故國川王之弟也、魏書曰、

（魏志、高句麗傳）

朱蒙裔孫宮、生而開目能視、是爲太祖、今王是太祖曾孫、亦生而視人、似曾

祖宮、高句麗呼相似爲位、故名位宮云、故國川王無子、故延優嗣立、初故國川王之薨也、王后于氏祕不發喪、夜往王弟

發岐宅、……（以下略……王后于氏と王弟發岐延優との關係、延優の即位、發岐遼東に於て公孫度の援助を得て叛

亂及びその自死のことを語り傳へてゐる）

二十一年秋八月、漢平州人夏瑤以百姓一千餘家來投、王納之、安置柵城、

東川王十年春二月、吳王孫權遣使者胡衛通和、

（魏志、明帝紀）

王留其使、至秋七月斬之、傳首於魏、

十一年、遣使如魏賀改年號、是景初元年也、

十二年、

（魏志、高句麗傳）

魏太傅司馬宣王率衆討公孫淵、王遣主簿大加、將兵千人助之、

十六年、王遣將

（魏志、高句麗傳）

襲破遼東西安平、

二十年秋八月、〔魏志、毋丘儉傳〕梁書、高句麗傳、正始五年、魏遣幽州刺史毋丘儉、將萬人、出玄菟來侵、王將步騎二萬人、逆戰於沸流水上敗之、斬首三千餘級、又引兵

再戰於梁貊之谷、〔同上〕又敗之、斬獲三千餘人、王謂諸將曰、魏大兵反不如我之小兵、毋丘儉者魏之名將、今日命在我掌握

之中乎、乃領鐵騎五千進而擊之、儉爲方陣、決死而戰、我軍大潰、死者一萬八千餘人、王以一千餘騎奔鴨渚原、冬

十月、〔同上〕儉攻陷丸都城屠之、乃遣將軍王順追王、王奔南沃沮、至于竹嶺、軍士分散殆盡、唯東部密友獨在側、謂王曰、

……〔中略〕東部密友・下部劉屋句・東部人紐田等の善謀力戰により魏軍を破る……魏軍擾亂不能陳、遂自樂

浪而退、王復國論功、以密友・紐由爲第一、賜密友巨谷青木谷、賜屋句鴨渚・杜訥河原、以爲食邑、追贈紐由爲

九使者、又以其子多優爲大使者、是役也、〔毋丘儉傳、政治通鑑〕魏將到肅慎南界、刻石紀功、又到丸都山、銘不耐城而歸、初其臣得來見王侵叛中

國、數諫、王不從、得來嘆曰、立見此地將生蓬蒿、遂不食而死、毋丘儉令諸軍不壞其墓、不伐其樹、得其妻子、皆放遣之、〔分註

略す〕

中川王十二年冬十二月、王敗于杜訥之谷、魏將尉遲〔名犯長陵諱〕將兵來伐、王簡精騎五千、戰於梁貊之谷敗之、斬首八千餘

級、

烽上王二年秋八月、慕容廆來侵、王欲往新城避賊、行至鵠林、慕容廆知王出、引兵追之、將及、王懼、時新城宰北部

小兄高奴子領五百騎迎王、逢賊奮擊之、廆軍敗退、王喜、加高奴子爵爲大兄、兼賜鵠林爲食邑、

五年秋八月、慕容廆來侵、至故國原、見西川王墓、使人發之、役者有暴死者、亦聞壙內有樂聲、恐有神乃引退、王謂

羣臣曰、慕容氏兵馬精強、屢犯我疆場、爲之奈何、相國倉助利對曰、北部大兄高奴子賢且勇、大王若欲禦寇安民、

非高奴子無可用者、王以高奴子爲新城太守、善政有威聲、慕容廆不復來寇、

以上煩を厭はず摘記したところは麗紀前半記載の對支關係記事のすべてであり、且8ポイント組の部分は中國側文

獻史料によつて記入されたことの明らかに推知されるものである。これによつて知り得るところは、麗紀前半に於ても後半に於けると同様に中國側史料によるところ甚だ多かつたことであるが、然しその間に於て後半部と著しく相違するところがあり、即ち中國側史料に依らない獨自の内容を持つ記事が若干含まれてゐると云ふことである。勿論その内琉璃王三十三年、故國川王十九年、東川王十一年、中川王十二年の各記事は、その典據を中國側史料の内から、適確に指摘することが出来なかつたけれども、何か中國史料に依つたか、乃至は麗紀撰者の假構したものか、その何れかである公算は甚だ大である（但し、琉璃王三十三年の場合の烏伊摩離の名は、何か古い傳承によつた人名であらう）。だからこれを除いたものに就いて考へるに、先づ第一に山上王即位の條に記された延優（山上王）と發岐との王位繼承の爭亂に聯關して遼東の公孫氏との交戰を語る記事である。この記事は『魏志』高句麗傳に見える伊夷謨と拔奇の事件と一致するものであり、且麗紀のこの記事が高句麗の獨立の史料によつたものであることは、麗紀自らが伊夷謨を故川王（男武）に誤當して『魏志』の文を引用してゐることによつても實證し得る。延優・發岐事件に關する麗紀の記事が『魏志』の記事とかく内容的に符合することは、明らかに高句麗側史料にも信賴すべきものゝ存したことを雄辨に物語るものであり、従つて爾餘の記事にもこの種のものが含まれてゐることを豫想せしめるものである。次に大武神王十五年の王子好童の樂浪討伐の記事である。全く傳説風のものであり、正確な年代史的事實ではないが、又史家の假作すべき性質のものでもなく、それが高句麗の傳承的史料に依つたものなることは認めてよからう。これら延優に關する記事にしろ、好童の話にしろ、對外關係記事を含んではゐるが、元來は王位繼承問題に關する所傳が中心であり、たまたまそれに聯關する一要素として對外問題が語られてゐるのである。而して後にも説く如く、麗紀前半の國內的事實に於て注意すべきは王位繼承の爭ひに關するものが少くなく、且それが高句麗史の一大特色となつ

てゐることであるが、右の二つの記事もさうした種類に屬してゐるのである。記事の性質がさうであるから、對外關係事項を年代史的に正確には傳へ得たものではないにしても、少くとも古い傳へに基く記事としてその史料價值を認めるに吝かであつてはならぬ。

次に大武神王十一年の尉那巖城籠城の記事、新大王八年の明臨答夫の漢軍を大敗せしめた記事、故國川王六年の王子麴須の漢軍を敗る記事、東川王二十年の魏將母丘儉の侵入の際に於ける東部密友・下部劉屋句・東部紐由など奮戰の記事、烽上王二年及び五年の北部小兄高奴子の慕容廆軍を敗つた記事、これらの對外諸記事は何れも共通の性質を持つてゐる。即ち、(イ)比較的詳しい内容を持つてゐる重大事件の記事であるが中國側史料に該當するものがないこと、(ロ)高句麗式の人名が見え、且さうした人物中心の記事であることである。而して(イ)の中國側史料に該當するものを見ないと云ふことは、麗紀の記事の價值を否定するものではなくして、寧ろその獨自性を示唆するものである。このことは(ロ)の人物中心の記事であると云ふ點にも聯關して來る。即ち支那史料文獻の如く事件中心の年代史的編纂記事としてではなく、人物中心の所傳たるところに、民族傳承的な性質を讀みとることが出来る。勿論それは編年史的には不完全であり、年代史としては矛盾があるが、さうした矛盾を指摘して、この種の麗紀の記事の史料價值を否定してしまふ一部論者の所論は必ずしも公正な態度とは云ひ得ない。少くとも吾人は編年式な麗紀の枠からそれを取外す時それ本來の史料價值に於て利用することが出来るであらう。なほ東川王二十年の記事に於て見られる如く、麗紀は『資治通鑑』、『魏志』母丘儉傳などによつて魏軍侵入の事件を記載し、その間へ東部密友・下部劉屋句・東部紐由などに關する獨自の所傳を配してゐる。想ふに密友などの傳記的所傳はその内容から云つて母丘儉侵入事件に當てるだけの手掛りがあつたので、麗紀撰者は右の如く兩史料を組み合せ得たのであるが、爾餘の高句麗側

の對外史料は恐らくさうした年時考證の手掛りがなかつたので、適宜の年次に配置したのである。然しその配置の遣り方がどの程度に正當であるかは甚だ疑はしく、かの『魏志』高句麗傳の伊夷謨・拔奇的記事と麗紀自らの延優・發岐の記事との比較考證を誤つてゐる麗紀の考證能力からすれば、そこに餘り多くを期待し難いであらうが、然し若しその配置された年次の誤謬の故を以て、一途にそこに使用されてゐる史料の傳承的内容までを否定するならば、これまた行きすぎである。

今一つ留意しなくてはならぬことは、高句麗側の對外史料が中國側のものと殆ど一致してゐないと云ふ點で、それは史料の正誤にかゝると云ふよりも、寧ろ史料の性質的相違を示すものと解さるべきであらう。すなわち上掲の諸例が示す如く、民族的な所傳は對外問題をそれ自體に即した年代史的政治史的記事としてではなく、自らの國內問題や國家的人物の傳記を語ることに主點を置いてそれを語つてゐるのである。故に外交史としては正常なものではなく、又その史料の配置に於ては年代史的正確は固より期待し難いにしても、今それを民族精神史或は社會史の面に於ては、充分の史料價值を發揮せしめ得るものである。故に中國史料との比較によつて高句麗史を批判せんとする場合、おのづからそこに限界があり、麗紀を一途に否定するやうな行過ぎを警戒しなければならぬ。

次に對支關係以外の對外記事として注意すべきものは對扶餘關係事項である。高句麗と扶餘とは民族的に同種であるばかりでなく、高句麗の始祖朱蒙が扶餘出身であると云ふ傳説から云つても、兩者の關係は通常の對外關係とは自ら趣を異にして居り、この意味で準國內的の記事と見られる。對外事項に關心を持つこと稀薄であつた高句麗側の史傳であるに拘らず、扶餘關係に於ては比較的多くの所傳を記してゐるのは、それが民族的事項としての性質を持つてゐたが爲である。左に扶餘關係記事の要點を列記して見よう。

始祖東明聖王建國の條——朱蒙の扶餘に於ける出誕、扶餘王長子帶素の迫害、朱蒙の南走、高句麗の建國。

十四年——王母柳花東扶餘に薨ず。

琉璃明王即位の條——朱蒙の太子類利扶餘より來る。

十四年——帶素の遣使、質子の要求、扶餘軍の來攻。

二十八年——帶素高句麗の服屬を求む。

三十二年——扶餘人來侵、鶴盤嶺下に之を敗る。

大武神王三年——帶素赤鳥を送り來る。

四年——扶餘を伐つ。

五年——扶餘王を執へて斬頭す。扶餘王弟及び從弟の來屬と曷思國、楸那部の由來。

大祖大王二十五年——扶餘使來獻。

五十三年——扶餘使來獻。

六十九年冬十月、王幸_ニ扶餘_一、祀_ニ太后廟_一、存_ニ問百姓窮困者_一、賜_レ物有_レ差、十一月、王至_レ自_ニ扶餘_一、王以_ニ遂成_一統_ニ軍國事_一、十二月、王率_{馬韓獬貊}一萬餘騎、進圍玄菟城、扶餘王遣子尉仇臺、領兵二萬、與漢兵并力拒戰、我軍大敗、

文咨三年二月、扶餘王及妻孥以_レ國來降

以上對扶餘關係の記事の要旨を摘録したのであるが、これを一覽して氣付くことは、大武神王代以前と以後とに明らかな相違の見られることである。即ち始祖王より大武神王五年に至るまでの記事は殆ど扶餘王帶素に關係ある所傳で、内容的に云つても可なりの豊富さを示してゐる。さうして高句麗建國當初帶素は優勢を示して高句麗を壓迫しつ

いけたが、最後に敗死すると云ふ一連した内容的聯關を持つた記事である。帶素は朱蒙の異母兄であり、その迫害の爲に朱蒙は生國扶餘を遁れて南走して高句麗を建國すると云ふのがその建國傳説の筋であり、従つて帶素は建國傳説上の朱蒙の仇役であり、その後の帶素關係の諸記事はさうした觀念の延長に外ならぬ。傳説的にその内容が若干豊富であると云ふことも、それが始祖傳説の延長であると云ふ點から了解せられるであらうし、且又この記事が史家の机上で假作されたものではなく、古くからの民族的傳承らしいことは、それを一讀して看取されよう。扶餘王帶素の名も『後漢書』『魏志』『晉書』などには見えないから、高句麗側の傳へであつたことは明らかだが、それが傳説上の人名なるの故を以て假空の人物なりと速斷することは許されない。實在の扶餘王帶素と高句麗王との連年の争ひと云ふ事實が右の傳説に反映したものと解する方が、傳説なるものゝ本質からして、寧ろ蓋然率が大である。但し帶素王の治世を麗紀の記してゐる年次の如く考ふべきではなく、この點では麗紀は何らの信頼性をも持つものではない。傳説はやはり傳説である。

次に大祖大王以後の記事は、國王の六十九年十二月條に『後漢書』高句麗傳から採つてゐるもの以外には、假作記事と見て大過なからう。但し最後の文咨王三年の扶餘王の來降の記事は、或る時の史實を傳へたものであるにしてもその年次は必ずしも麗紀の云ふところが正確であつたかどうか問題である。

その他の對外記事として鮮卑・肅慎關係の二記事がある。即ち

琉璃王十一年夏四月、王謂羣臣曰、鮮卑恃險、不_レ我和親、利則出抄、不利則入守、爲_レ國之患、若有_二人能折_レ此者_一我將重賞_レ之、……そこで扶芬奴の善謀勇戰によつて遂に鮮卑を討伐服屬せしめるを得、扶分奴を厚く賞した。

西川王十一年冬十月、肅慎來侵、屠_二害邊民_一王謂羣臣、……王弟過賈の智略勇戰によつて討伐に成功した。王大悅、

拜_ニ過_ニ賈_ニ爲_ニ安國君_一、知_ニ内外兵馬事_一、兼統_ニ梁貊肅慎諸部落_一、

と云ふ記事で兩者甚だよく似てゐる。先づこゝに鮮卑・肅慎の名が出て来るのは甚だ妙な話で、又その時代の出來事としても明らかに矛盾してゐる。勿論鮮卑・肅慎の名は漢籍から借來つたものであり、又年代的には間違つて組み入れられたとするも、それらを取除いて見る時、扶芬奴や安國君過賈の話は勇士の傳説として傳へられてゐたものであらう。その他大祖大王六十九年の肅慎來貢に關する簡單な記事などもあるが問題ではない。

第二項 王世系に關する國內史料

次に麗紀前半部所載の諸王の世系の問題である。麗紀後半部の諸王の世系に就いて考察し得た結論は、高句麗の古傳として諸王の即位、在位の年數及びその系譜が傳へられて居り、且中國側資料との比較によつて、それが麗紀記事の最も信賴され得る部分であると云ふことであつた。今前半部に於ける同問題の考察に當つても、この結論は有力な參考となると共に、果して前半部に於ても同様なことが云ひ得られるか否かが第一の問題となる。先づ麗紀によつて王名及び即位年次を略記して見よう。

第一代東明聖王。諱朱蒙、一云鄒牟一云象解。在位、西紀前三七——前一九年。

第二代琉璃明王。諱類利、或云孺留。朱蒙元子。在位、前一九——一八年。

第三代大武神王。或云、大解朱留王、諱無恤。琉璃王第三子。在位、一八——四四年。

第四代閔中王。諱解色朱。大武神王之弟也。在位、四四——四八年。

第五代慕本王。諱解憂、一云、解愛婁。大武神元子。在位、四八——五三年。

第六代太祖大王。或云國祖王、諱宮、小名於漱。琉璃王子古鄒加再思之子。在位、五三——一四六年。

第七代次大王。諱遂成。太祖大王同母弟。在位、一四六——一六五年。

第八代新大王。諱伯固固一作句太祖大王之季弟。在位、一六五——一七九年。

第九代故國川王、或云國襄。諱男武。或云伊夷謨。大王伯固之第二子。在位、一七九——一九七年。

第十代山上王。諱延優、一名位宮。故國川王之弟也。在位、一九七——二二七年。

第十一代東川王、或云東襄。諱憂位居、少名郊薺。山上王之子。在位、二二七——二四八年。

第十二代中川王、或云中壤。諱然弗。東川王之子。在位、二四八——二七〇年。

第十三代西川王、或云西壤。諱藥盧、一云若友。中川王第二子。在位、二七〇——二九二年。

第十四代烽上王、一云雉葛。諱相夫、或云敵夫婁。西川王之太子也。在位、二九二——三〇〇年。

第十五代美川王、一云好壤王。諱乙弗。西川王之子古鄒加咄固之子。在位、三〇〇——三三一年。

右の内8ポイント活字のところは中國側史料と一致する王名(諱)である。麗紀の傳へる王代及びその世系は右の如くであるが、然らば中國側史料によつては如何なる程度にそれを知り得るであらうか。先づ史料を列記しよう。

句麗侯騶。^{12 A.D.}「始建國四年……誘句麗侯騶至而斬焉、」(『漢書』王莽傳)

句麗王宮。^{49 A.D.}「建武二十五年春、句麗寇右北平・漁陽・上谷・太原、……後句麗王宮生而……」(同)。「元興元年春、」^(100 五年)

高句麗王宮入遼東塞、寇略六縣、」(『資治通鑑』漢紀孝和)。「安帝永初五年、^{111 A.D.}宮遣使貢獻、求屬玄菟、」(『後漢書』高

句麗傳)。「建光元年……^{121 A.D.}是歲宮死、子遂成立、」(同)。以上によつて宮在位の明瞭に知られるのは一〇五——二二

一年の間であり、宮の即位は四九年以後である。

遂成。^{123 A.D.}「明年。延光元年遂成還漢生口、詣玄菟降、」……遂成死、子伯固立、其後獺貊率服、東垂少事、順帝陽嘉元年置玄菟郡屯田六部」。^{124 A.D.}遂成の即位は二二一年にして、死は二二二年以後、二二二年前である。

伯固。^{125 A.D.}「建寧二年……伯固降屬遂東、⁽³⁾嘉平中伯固乞屬玄菟、公孫度之雄海東也、伯固遣大加優居主簿然人等、助度擊富山賊破之、」^{126 A.D.}「魏志」高句麗傳。伯固の即位は一三二年前であり、その死は一八九年以後である。なほ『魏志』は「宮死、子伯固立、順桓之間、復犯遂東、云云」と記し、宮と伯固の間の遂成を落してゐる。

伊夷模。「伯固死、有二子、長子拔奇、小子伊夷模、拔奇不肖、國人便共立伊夷模爲王、……建安中公孫康出軍擊之、」^{127 A.D.}「魏志」高句麗傳。公孫度死し康が後を嗣いだのは建安九年である。伊夷模の即位は一八九年以後であり、二〇四年頃には在位中である。

位宮。「伊夷模無子、淫灌奴部生子、名位宮、伊夷模死、立以爲王、今句麗王宮是也、」^{128 A.D.}「魏志」高句麗傳。「吳嘉禾二年吳使張彌等遁れて高句麗に達す、吳主句麗王宮及び主簿に宣詔す、」^{129 A.D.}『三國志』吳志、吳主傳、『資治通鑑』魏紀列祖。「正始六年、復征之、宮遂奔買溝、」^{130 A.D.}「魏志」母丘儉傳。「正始七年、幽州刺史母丘儉、以高句麗王位宮數爲侵叛、督諸軍討之、」^{131 A.D.}「資治通鑑」魏紀陵厲公。位居の在位の明知し得るのは二三三——二四五年（二四六年、但し通鑑は誤記か）の間であり、即位及び死はその前後の然るべき年である。

乙弗利。^{132 A.D.}「晉永嘉……句麗王乙弗利、頻寇遂東、」^{133 A.D.}「梁書」高句麗傳。乙弗利が三〇七——三二二年の頃在位したことが分明する。

麗紀によれば始祖王より美川王に至るまでの間十五王代が傳へられて居り、中國側史料によれば、この間に知られる高句麗王は騶・宮・遂成・伯固・伊夷模・位宮・乙弗利の七王であり、今これを麗紀と比較表示すれば次の如くであ

(麗紀)
 東明王(朱蒙) 378C.
 198C.
 琉璃王(類利) 0
 18AD.
 大武神王(無恤) 44AD.
 48AD.
 48AD.
 53AD.
 太祖大王(宮於激) 148AD.
 次子(遂成)

(漢史)

7
 驃
 12AD.

45AD.

105AD.

宮

121AD.

遂成

132AD.

伯固

(麗紀)
 165AD.
 179AD.
 故國川王
 197AD.
 山上王(延優位宮)
 227AD.
 東山王(宣義位宮)
 248AD.
 中山王(然弗)
 270AD.
 西川王(蒙虜墓)
 292AD.
 烽上王(相失)
 300AD.
 美川王(乙弗)

(漢史)

189AD.

伊夷模
 204AD.

233AD.

245AD.

位宮

る。而して麗紀は王の世系に關し中國側史料を如何なる程度に參考し得べきであり、且また實際に參考したか。先づ王の諱として宮・遂成・伯固・伊夷模・位宮・乙弗利をそれぞれの王に當て或は註記してゐるが、それ以上は參考してゐないし、また參考することは不可能でもあつた。麗紀は寧ろ高句麗側の所傳を尊重して居り、中國側史料によつてはそれを變更してゐない。左にその一二の點を指摘しよう。

三國史記高句麗本紀の原典批判

(イ) 『後漢書』によれば宮・遂成・伯固の三王は父子相續であるが、麗紀では太祖大王(宮)、次大王(遂成)、新大王(伯固)は兄弟繼承である。何れが正しいかは不明であるが、中國史籍が外國の王世系を記する場合最も多く誤記を犯すのは父子相續の形にしてしまふことで、そのことは既に述べたところである。而して他方高句麗の王位繼承は兄弟相繼ぐ場合が甚だ多く、そこに高句麗王代史の顯著な特徴を見得るのである。これらのことを顧慮する時、麗紀の兄弟繼承により多くの信頼性を覺えざるを得ない。而して麗紀はこの點高句麗側の所傳を重じてゐるのである。

(ロ) 既説の如く太祖大王の讓位の年を麗紀は王の九十四年即ち一四六年とし、『後漢書』が句麗王宮の死を建光元年即ち一二一年とせるのと、『海東古記』の所傳とが抵牾し直に符合せざることを註記し、後者に據つたことを明記してゐる。

(ハ) 麗紀が『魏志』の云ふ伊夷模を故國川王男武に當てゝゐるのは誤りであるが、かく誤つたのは高句麗側所傳の王代を基として、『魏志』の麗王の名を機械的に次々當てゝ行つたが爲に、『魏志』には故國川王に當る麗王名が缺けてゐるところから一代の誤差を生じたのである。

同様のことは宮以前の麗王の世系に就いても云ひ得る。『漢書』王莽傳の句麗侯騶に就いては麗紀は考證し得なかつたが爲か、これを全然採上げてゐない(但し麗紀は琉璃王三十一年に王莽との事件を『漢書』によつて書いてゐるが、騶なる名を省いて吾王と改めてゐる)。中國側の文獻には今一つ宮以前の王の世系が載録されてゐる。即ち『魏書』高句麗傳に朱蒙の建國傳説を載せ、それに續いて宮に至るまでの世系を次の如く記してゐる。

初朱蒙在夫餘時、妻懷孕、朱蒙逃後生一子、字始間諳、及長知朱蒙爲國主、即與母亡而歸之、名之曰間達、委之國

事、朱蒙死、閔達代立、閔達死、子如栗代立、如栗死、子莫來代立、乃征夫餘、夫餘大敗、遂統屬焉、莫來子孫相傳、至裔孫宮、生而開目能視、其國人惡之……、

これによると麗王の世系は、

朱蒙——閔達——如栗——莫來……宮

となる。中國文獻所載のこの世系は、朱蒙の傳説と共に、長壽王二十三年以來頻々と北魏に朝貢した麗使から聞き傳へたものであらう。ところが右の文の内、宮に關する「生而開目能視……」以下は『魏志』の文によつたことは明らかだから、麗使から傳聞した所傳は莫來までのことであり、この麗使よりの傳聞と『魏志』の宮の記事とを結び付けたのが『魏書』撰者の「莫來子孫相傳、至裔孫宮」の句であり、従つて莫來から宮に至る關係は『魏書』撰者の机上の仕事なることも明らかである。^⑧ 朱蒙より莫來に至る四王の世系は『魏書』の記事であると云ふものゝ、元來は高句麗側の傳承であつたのであるが、かゝる所傳に對しても麗紀は自らの史料に準據して、それを参照した跡を全然示してゐない。

以上論證するところによつて、麗紀前半部に於ても、後半部に於けると同様、麗紀諸王の即位年次、在位年數及びその系譜に關する高句麗側の所傳を典據として居り、決して中國側の史料によつて王の世系を作り上げたものではない。即ち麗紀は王の世系に關して獨自の立場を持してゐるのである。勿論麗紀が高句麗側の所傳に準據したと云ふことは、勿論這般の所傳が中國側のそれよりも史實的に正確であつたと云ふことを意味しない。問題は自ら別である。

右の如く麗紀の撰述態度を論考し得たが、この問題に對して既に先學の論説があり、津田左右吉博士の「三國史記高句麗紀の批判」(『滿鮮地理歷史』(研究報告)第九)及び池内宏博士の「高句麗王家の上世の世系について」(『東亞學』第三輯)「高句麗の建國傳

説と史上の事實」(『東洋學報』第二十八卷第二號)の諸篇がそれである。そこで問題として採上げられてゐるのは、第一に太祖大王から故國川王に至る諸王代の批判であり、第二に慕本王以前の傳說的諸王の問題である。そこでは麗紀が依據した高句麗側の史籍例へば『海東古記』の類が如何なる程度に中國史籍から造作されたかが論點となつて居り、即ち慕本王・太祖大王・次大王・新大王・故國川王・山上王の世系の内、津田博士は太祖大王・次大王の二代が中國史籍から造作されたものであるとされ、池内博士は太祖大王・次大王・新大王の三代が造作されたものであると推斷されてゐる。何れも斬新な考證批判として後進には得難い教示である。即ち津田博士は、

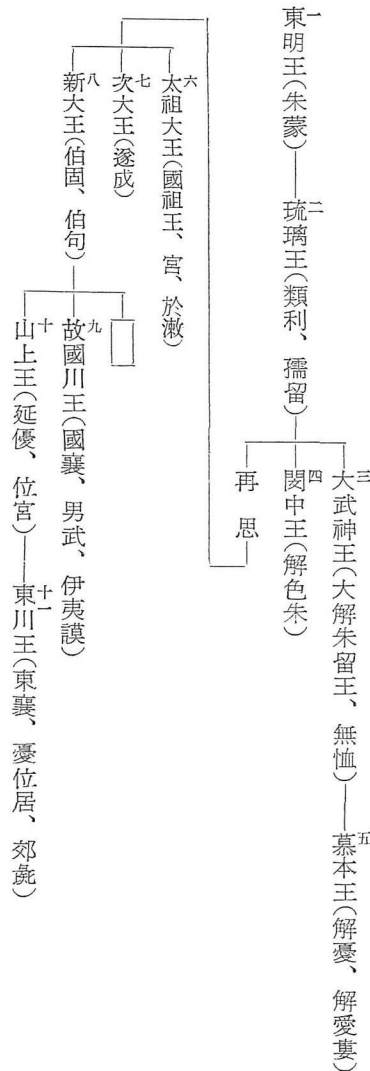
「故國川王男武は支那の史籍には見えないが、公孫氏との關係や毋丘儉の來攻などに於いて時代の合はない點が生ずるにも拘はらず、伯固・伊夷模・位宮といふ順になつてゐる支那の史籍の記載によつて強いて此の男武と次の山上王延優とを伊夷模と位宮とに擬したところから見ると、此の王を世系に加へてある動し難い史料のあつたことは明らかである。新大王伯固(又は伯句)も亦同じ理由によつて同じ史料から出たと考へられる。伊夷模を男武に擬したのは其の前に伯固があつたからと見なければならぬからである。さうして此の史料は高句麗人の記録であることが自然に推測せられる。」(頁二六)「支那の史籍と全く同じ名のみが見える宮と遂成とは、本に溯つて見ると後漢書と魏志とから出たものである、と推測してもよからうでは無いか。さうしてそれは太祖大王または國祖王といふ王の稱號によつて確められよう。宮と遂成とを太祖大王及び次大王とすることは、伯固の新大王と共に此の三代を一つまとめにしてつけた稱號らしく見え、従つてそれはよほど後世の仕事であると見なければならぬ。」(頁三一)

と論ぜられ、池内博士は、

「本來慕本王(三品曰、同博士は慕本王は『魏書』の莫來に比定されてゐる)は男武を直後の王として延優以下の

世系に接續してゐたであらう。即ち男武についていへば、此の古い形の世系に於いては、男武は前後に慕本王と延優とを控へた王であつて、空想の人物と見るべき諸王と、歴史上確かに存在した諸王との境目に立つてゐたのであらう。然るに海東古記の撰者は漢史の記載に依つて自國の上代に宮・遂成・伯固といふ三代の王のあつたことを知り、これ等三王にそれ〴〵太祖大王・次大王・新大王の稱號を與へて、之を古い系圖の中に編み込み、さうして宮の世代の順位を慕本王の次に置いたのであらう。」

と推定されてゐる。なほ後者の所説を明瞭ならしめる爲系圖によつて示して置かう。



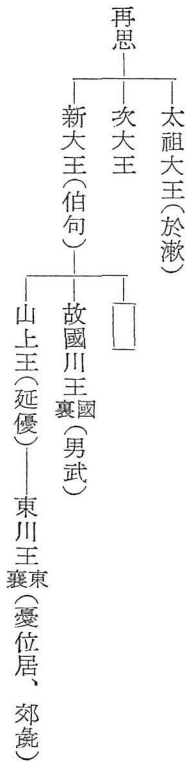
右系譜中8ポイント活字の王名が漢史によつて造作されたと云ふのである。博士の考證と論斷とは誠に銳利であり明快である。然しながら今一應その論程を顧みつゝその論斷を反省して見よう。先づ問題の慕本王から東川王に至る間の王名(稱號及び諱)に就いて再調査を試みるに、高句麗側の史料に王の諱乃至幼名が傳へられてゐないのは次大王

(遂成)と新大王(伯固、伯句)であり、麗紀(の典據たる『海東古記』が漢史から遂成・伯固の名を借用したことは明らかである。(麗紀が「新大王、諱伯固固一作句」と記してゐるのは、恐らく麗紀撰者自身が伯固を漢史によつて記入し、伯句は『海東古記』が漢史の伯固によつて伯句と異字使用したものと考へてよからう。)次に太祖大王の諱宮も漢史によつたに違ひないが、その幼名として傳へてゐる於澈は高句麗側の所傳であつたに違ひなく、或は於澈は單に幼名でなく諱であつたのを宮を諱として借用したので於澈を幼名としたのかも知れない。かく漢史から諱を借用して來たこれら三王が、その稱號に於て太祖大王・次大王・新大王と云ふ特殊な呼び方をしてゐることを考へると、王世系上に於けるこの三王の地位は甚だ疑問なものであり、漢史による挿入であるとの推斷が下されてもよさうである。少くとも右の點のみに焦點を合せての推斷は當然さうならなくてはならぬ。が然し今少し焦點域を廣くつて見れば、その結果は如何になるであらうか。

扱て右の推斷を肯定する場合には若干無理な點が生じて來る。即ち宮以下の三王が漢史によつて考證の結果挿入されたとするならば、三王の年代を何が故に漢史に合さなかつたのか。前掲の比較表を見ても分るやうに太祖大王(宮)の治世を九十四ヶ年とする程に後代まで下げて、次大王(遂成)と新大王(伯固)との年代を態々漢史よりおくらしてしまふ理由はない筈である。このことは明らかに高句麗側によるべきものがあつたことを示唆してゐる。さうして高句麗側の所傳は漢史と比較すると間違つてはゐるけれども、そのこと自ずから漢史によつて造作されたものでない所傳の存在を明瞭に語つてゐるのではなからうか。次にこれら三世の系譜は漢史には父子三代の關係になつてゐるが、麗紀では三王は兄弟の關係となつて居り、若し後者が前者によつて造作されたならば何も殊更に父子三代關係を兄弟關係に改めなくてもよさうである。このことに就いては既に附言したことであるが、麗句麗の王位繼承は兄弟相續

の場合が甚だ多く、そこに一つの特徴が見られるのであつて、宮以下三代が兄弟相續であつた方が事實的だとも考へられ、この點もやはり高句麗側に獨自の系譜が傳へられてゐたと考へ度い。なほ池内博士の三代挿入説の今一つの根據となつてゐるものに『魏書』の莫來と麗紀の慕本王を同一なりとの考へがある。即ち『魏書』高句麗傳の高句麗第四代王の莫來を麗紀第五代の慕本王——高句麗の傳承せる傳説上の王——に、『海東古記』の撰者が比定し、その後宮以下三代を挿入したと云ふのである。莫來と慕本との來本は何れかが誤寫であると池内博士は推定し、さうした推定眼を古記の撰者に持たせられてゐるのであるが、さうすることは古記の撰者が現代的な考證眼を持ち過ぎたことにはなりはしないだらうか。

麗紀の王諱を一讀するに、何人も容易に氣付く如く、漢史に見える宮・遂成・伯固・伊夷謨・位宮の五王を太祖大王以下の五代に全く機械的に逐次當填めてゐるのであつて、その爲故國川王以下三代は——故國川王に當る王が漢史には缺けてゐるので（伯固と伊夷謨との間に故國川王男武があつたのを『魏志』が落してゐるのである。事實『魏志』は「宮死、子伯固立」と云つて遂成をも落してゐる。）——一代づつずれてしまつてゐるのも不思議はないのである。このことから考へても漢史（間違つた）王名を記入したのは麗紀の撰者であり、今その記入名を除き去つたものが古記の王曆であつたと一應考へて見てはどうだらうか。すると次の如き王曆が得られる。



この古記の所傳と推定された系譜を見る時、次大王には諱を缺き、新大王には漢史の伯固から出たと思はれる伯句といふ諱があるので、次大王にも古記の時既に漢史の遂成と云ふ名が借用されてゐたとも考へられるかも知れないが、さうしたことから宮以下三代王を後代の古記の挿入なりとまで推論することは少なからざる飛躍であり、またさうした推定は上述の如き矛盾が生ずるのである。そこで假に吾人は麗紀の王曆を古い高句麗側の所傳であつたと考へて見た場合は如何であらうか。好太王碑に第三代大朱留王より廣開土王に至るまでを十七世として居り、即ち

顧命世子儒留王、以道興治、大朱留王紹承基業、（傳）至十七世孫國岡上廣開土境平安好太王、

と見えてゐる。碑文の始祖鄒牟は麗紀の朱蒙（一云鄒牟、一云象解）であり、第二代儒留は麗紀の琉璃（類利、或云儒留）であり、第三代大朱留は麗紀の大武神王（或云、大解朱留王）であり、それから十七代目は碑文では國岡上廣開土境平安好太王であり、麗紀では廣開土王（談德）である。即ち碑文と麗紀とは全く一致してゐる。今西龍博士はこの兩者の一致を指摘して、

「史記の紀する世系は長壽王頃に傳へしものと大差なきことを示せり。但し史記によるに廣開土王は大朱留王の直系の子孫なりと傳へざるを以て、十七世孫とは王位の世代を稱するなり、これにても當時高句麗に繼承の思想の既に行れ居りしことを知るべし。」^⑨

と論斷されてゐる。勿論この十七世を世代と解し、廣開土王まで十七世でないとの説があるが、今西博士の如く王代數と解すべきであり、殊更に世代數と解して麗紀との不一致を取上げるのは如何であらうか。

かく麗紀の世系、從つてその典據となつた古記の世系は廣開土王時代の世系と一致するものであり、從つて高句麗のずつと後代に宮以下三代が挿入されたとか、また津田博士の如く『海東古記』は新羅人の記録であるとか斷定して

しまふことには無理があるのではなからうか。さうして麗紀後半部に於て結論し得たこと、即ち高句麗の古傳として諸王の即位年次、在位年數及びその系譜が傳へられてゐたと云ふことは、前半部に於ても等しく云ひ得られるところである。さうしてその傳説時代の所傳に於ても廣開土王・長壽王の頃即ち五世紀初葉に現傳の基礎が出来てゐたと見て大過なからう。

第三項 自國の傳承史料の取扱ひ

太祖大王宮以前に於ける諸王の名は、中國側史料には比較されるものを持たないが、幸ひ麗紀の外に好太王碑及び『魏書』高句傳に傳説的な王名が若干見えて居り、既述のところでは好太王碑文の鄒牟・儒留・大朱留が麗紀の朱蒙・類利（儒留）・大解朱留と一致することを指摘して置いた。が『魏書』の朱蒙・閔達・如栗・莫來の四王の内麗紀と一致するのは朱蒙だけであり、如栗は麗紀の類利と類音ではあるが第三代王と第二代王との相違があり、この點から推して好太王碑文とは別系の所傳であつたことは明らかである。『魏書』の所傳は長壽王の頃（第五世紀）に魏人が麗使から聞採つたものと推定されてゐるが、それが王名に於て好太王碑の所傳と一致するところ少いことは、兩者が殆ど同時代の所傳でありながら、各々別系のものであつたことを示唆するものである。而して碑文は王陵に公式に建てられたものであり、又麗紀の所傳もその系統に屬してゐることよりすれば、碑文の所傳が國家的に認めた正統的なものであつたやうである。

傳説時代の所傳の内でも問題となるのは云ふまでもなく朱蒙の開國傳説である。麗紀以前の現存文獻で比較研究し得るものは『論衡』吉驗篇、『魏略』所引舊志、『後漢書』『好太王碑』『魏書』、李相國の「東明王篇」注所引『舊

國讓要素	國讓要素
人態的天神河伯神婚要素	
穀種授與要素	

右と共に比較さるべき地名及び人名の變化乃至増加は次表の如くである。

(地名)

論	衡	魏略(舊志)	後漢書	好太王碑	魏書	舊三國史記	麗紀
秦離國	秦離之國	秦離國	北夫餘				
掩漉水	施掩水	掩漉水(蓋斯水)	奄利大水	一大水	淹滯(蓋斯水)	淹漉水(蓋斯水)	
			沸流谷	普述水	沸流水	毛屯谷(普述水)	
			忽本西城	紇升骨城	卒本川	卒本川(紇骨城)	
					鯤淵	鯤淵	
					迦葉原	迦葉原	
					東夫餘	東夫餘	
					太伯山・優渤水	太白山・優渤水	
					城北青河		
					熊心淵	熊心山・鴨綠	

論衡(魏略・後漢書)	好太王碑	魏書	舊三國史	麗紀
秦離國王(北夫餘王)	夫餘王解夫婁	夫餘王解夫婁	夫餘王解夫婁	
婢(侍兒)河伯女郎	河北清河伯母 柳花・萱花・葦花	河伯之女柳花		
東明鄒牟朱蒙(善射)	東明王朱蒙(善射)	東明王朱蒙(善射)		
	鳥引・鳥遼	鳥引・摩離・陝父	鳥引・摩離・陝父	
	三人(著麻衣・衲衣・水藻衣)	克再思・仲室武骨・少室默居		
	金蛙	金蛙		
	阿蘭弗	阿蘭弗		
	解慕漱	解慕漱		
	天王郎			
		帶		素

さて傳説要素に就いて考へるに、先づ大氣感精要素と日光感精卵生要素との問題である。『論衡』などに見える大氣感精要素とは電光精氣などに感じて子を生むと云ふ類の話であるが、這般の要素は中國漢族の間に最も多く流傳してゐるもので、文化要素の系統から云へば明らかに漢族的要素と云つても過言ではない^⑩。扶餘のこの所傳はかうした漢族的要素を早くから受容してゐたのか、或は漢人の傳聞者が支那風に歪めて筆録したのか、その何れかであらう。然るに高句麗の傳承してゐた日光感精卵生要素は、その卵生と云ふ點で、漢族及び蒙滿諸族とは全く連絡のない、純

粹な半島の要素——廣く云へば南方海洋諸族に連絡する特殊要素であり——従つて『論衡』や『魏略』の扶餘傳説から高句麗の卵生傳説が文獻的に造作されると云ふ可能性は全く認め得ないのである。即ち『魏書』以下に傳へる高句麗の卵生傳説は古くからの半島民族的傳承であつたと確言し得るのである。

逃亡建國要素に就いては高句麗側の所傳は『論衡』などの扶餘傳説とその要點は殆ど一致し、文章の一部にまで借用の跡を明らかに見得るが、その内に高句麗の歴史と關係があつたと思はれる地名や人名が少からず添加されてゐるのであつて、このことは逃亡建國傳説要素が高句麗の歴史の内に成長して來たことを語るものである。地名に就いて云へば「好太王碑」には奄利水・沸流谷・忽本などの名が見え、『魏書』『舊三國史』『麗紀』にも前表に見るが如き「好太王碑」のそれぞれに該當する地名が見えてゐる。がこゝに注意し度いことは、問題の麗紀に於て、僅か三個の地名に關してどの文獻が主として参照されてゐるか云ふことである。『魏書』には一大水とあり、『舊三國史』には淹滯水とあるに對し、麗紀は淹滯水（蓋斯水）としてゐるが、これは明らかに『論衡』の淹滯水、『後漢書』の淹滯水（蓋斯水）を參考しての結果である。後に明瞭になるやうに、麗紀が朱蒙傳説に關し最も多く參考したのは『魏書』であるが、この水名は一大水とのみあつて名稱を缺いてゐるが爲に、麗紀撰者は『後漢書』などの漢史によつて淹滯水（蓋斯水）としたのである。（或は『舊三國史』の淹滯水が淹滯水の誤寫であるとすれば麗紀はそれに直接よつたものであらう。）然しこのことから後代麗紀が『後漢書』などによつて逃亡建國傳説を取り入れたと斷じてはならない。何故なら幸ひ吾々は、「好太王碑」に奄利大水の名で神助による渡河の話が見えて居り、可なり古くから高句麗に傳承されてゐた話であつたことを知り得るのである。のみならず高句麗族が古來移動的であつたことは歴史が語つて居り、且それは滿鮮境界地帯の歴史的性情と云へる。次に麗紀の卒本・沸流の名は『舊三國史』によつて居り、

これは又、麗紀は直接には知らなかつたにしても、古く「好太王碑」に忽本・沸流と傳へてゐる民族傳承的な名稱に源流を發するものである。それからこの部分の人名であるが、先づ始祖の名が麗紀及び『舊三國史』には東明王朱蒙となつてゐることで、碑文には鄒牟、又高句麗滅亡當時の傳へと考へられる『日本書紀』天智紀には仲牟、『三國史記』羅紀文武王十年の條には中牟、『魏書』には朱蒙とあり、これ又何れも古い傳承的な名であつたが、麗紀は『舊三國史』と共に『魏書』の朱蒙と云ふ傭字を採用して居るばかりでなく、『論衡』などによつて東明と云ふ稱號をまで添加してゐる。しかしこの東明の名に就いて考へて見なければならぬことは、『魏志』高句麗傳に秋の民族的大祭として——族祖に關係深い收穫祭と考へられるが——東盟と呼ばれる祭義を盛大に行つたことを記して居り、このことから（東明と東盟の相違はあるけれども）東明王の名もやはり民族的な傳承であり、強ち漢籍による後代の造作とのみ決めてしまへないのである。これら僅かな點に於ても、『麗紀』は文章傭字の上では『論衡』『後漢書』『魏書』などの中國文獻に對する高度の依存率を示してはゐるが、然しこのことは中國文獻によつて撰者が高句麗になかつたものを私に造作したのではなく、實は民族的な古き傳承をその背後に持つてゐたことを見のがしてはならぬ。但しそれはもつと民間傳承的な口碑所傳の類であつたであらう。

次に『舊三國史』遺文に至つて文獻的に初めて見え、それ以前のものには全く見えない傳説要素として蛙王子、國譲り、人態的天神河伯の神婚、穀種授與の四個の要素がある。これら四要素は文獻的には『舊三國史』に至つて始めて現はれて來るのであるが、それは僅かな現存の文獻を比較してのことであつて、さうした文獻比較によつてこれら諸要素を後世の假作となすことは甚だ危險であり、古代文化を文獻的にのみ考證論斷する論癖と云はねばならぬ。先づ蛙王子要素に就いて考へよう。この話の要點は扶餘王解夫婁が鯢淵に於て金色蛙形の小兒を得、金蛙と名付け立て

ゝ太子としたと云ふ話である。一見假作譚の如く考へられ勝ちである。津田左右吉博士は金蛙の名は新羅人の好尙から出たもので結局新羅人の造作であると推斷されてゐる。^⑧然し「蛙の王子」と云ふ説話要素はグリムの童話で著名であるばかりでなく、廣く世界的に分布してゐる興味ある要素であつて、既に民族學者達が採上げてゐる問題の一要素なのである。且また北ツングース族の哲赫族では祖靈を祀る神杆に聖鳥聖獸と共に蛙の聖畫を畫いてゐるが、^⑨這般の民俗を通じ、彼等の間では特定の蛙は聖なる動物であり、シャーマン靈或は祖靈として信仰的には結び付いてゐるのである。従つて蛙の王子と云ふが如き著名な説話要素が新羅の史家の机上で金閼智などから聯想して新羅知識人の好尙によつて造作せられたと云ふやうな輕卒な速斷は許さるべくもなく、寧ろ問題は這般の要素が高句麗に存するに至つた分布系統の考察、乃至はその呪術宗教的機能などが進んで考察されねばならないことを示唆している。現在のところ吾人は分布問題を明確ならしめるだけの資料を持つてゐないから後考に俟つより外はないが、少くともこの傳説は嘗て民族の生活乃至信仰に何らかの結び付きを持つてゐたものであり、新羅人の頭の中で造り上げられたものではあり得ないと云ふことだけは充分に云ひ得よう。

國讓り要素即ち高句麗の王たるべき日神即ち天帝の子が降ると云ふので扶餘王が東海濱に移つて國を神御子に譲つたと云ふ話であるが、この傳説には可なり永きに亘つた高句麗と扶餘との抗爭及び最後に前者が勝利を得たと云ふ明らかな史實が反映してゐると考へられ、少くとも高句麗の光榮の歴史と結び付いた傳説であり、従つてかゝる傳説を傳承し得るものは高句麗人でなくてはならぬ。次に人態の天神河伯神婚要素は原始的な日光感情要素の發展した形ではあるが、^⑩然しその神話的構想が著しく成長してゐる點で可なり後期のものであるとは推斷するに難くない。新羅の始祖傳説の類は何れも原始的な形であり、従つて新羅人にはこれだけの神話的構想は期待出來ない。構想の進度より

これを比較すれば、『三國遺事』所引の『舊洛國記』——大康年間（西紀一〇七五—一〇八四年）の筆録——のそれに比敵して居り、この點よりすれば王氏高麗期に入つてからの形であらう。然し高句麗人は新羅人より神話的構想の能力に於て遙かに優れてゐるが故に、この神婚傳説の古い形のものに既に高句麗時代にあつたと推定し得る可能率も亦甚だ大である。最後に穀種授與要素即ち朱蒙が母神から建國に當つて穀種を授かると云ふ話であるが、これは『魏志』に記載する東盟祭と本質的に結びついてゐる傳承であり、高句麗の古代生活に基礎を持つものにして、餘程古くからの傳へであつたと考へてよい。上述の如く、『舊三國史』に見え、それ以前の文獻には見えない蛙の王子以下の四要素中人態的天神河伯神婚物語を除いては、何れも明らかに民族的な古代傳承であり、可なり古くからのものなることが推知出來た。たとへこれら諸傳承の中に出て來る人名地名が後期的なものである——例へば解夫婁・解慕漱は解と云ふ百濟人の姓をもととして新羅人が造作したものであり、又大白山と云ふ地名は唐代に始めて現はれる山名で従つてこれ又新羅人の造作であるとの説のある如く——と云ふところから、物語そのもののまです新羅人或は王氏高麗人の机上の假作とする見解の如きは餘りに單純な行きすぎではあるまいか。神話傳説が現代的に考へて不合理であるとしても、又地理的知識が不明確であるとしても、それは決して後代の假作だと云ふ左證とはなり得ないし、その歴史性を否定するものでもない。又そこに出て來る人名や地名が後期的なものを含んでゐても、傳説要素の後期的假作の證據には全然なり得ない。何故なら神話傳説の類は現實的な關心に於て語られる限り、當然現實的な人名地名に當てられて行き勝ちであり、寧ろそれは傳承的生命を持つてゐた證據とも云へる。そして説話要素的には古い民族的なものを思ひの外永く保有してゐるのである。

このやうに『舊三國史』は蛙王子以下四個の要素を收録してゐるが、それを参照した麗紀はその内の二個即ち蛙王

子の話と國譲りの話だけを採擇し他の二つを省略してゐる。吾人はかうした態度の内に麗紀の撰者が神話的なものを低く評價しようとする合理主義を見得ると共に、前述した如く、『魏書』の記事に、又その他の支那側の文獻により多く依存し、その文章をまで殆ど採入れてゐることを特に注意し度い。が民族的な傳説のよりよき傳承者は中國史籍の撰者であるよりは、高句麗人であり又その後繼者でなくてはならぬ。麗紀の撰者が支那文獻を重じ、主としてそれに依存したとは云へ、實は常にその背後に民族的なる傳承が控えてゐたのである。或は漢籍に高句麗の建國傳説類が筆録されてゐなかつたならば、却つてそれに引付けられることなく、より純粹に民間傳承的なものが收録され得たかも知れない。例へば新羅の始祖傳説のやうに。

開國傳説の問題に就いてなほ一言付加へて置き度いことは、此種傳説が不合理であり、實事としてはあり得ないと云ふことから、それに史料の乃至歴史的價值がないとか、或は後代の造作であると斷ずる態度一般に就いてゐる。かうした見解は常に神話傳説をそのまゝに直譯して史實的に理解しようとする人達と同一の前提に立つものと云ふべく、一方はそのまゝに承認しようとし、他方はそのまゝを不合理として否定するに過ぎない。神話には古代文化史料として、又歴史なき民族の生活史として、その史料價值を發揮する面がある筈である。又神話的であつて史實的でないと云ふこと、或は事實としては前後矛盾してゐると云ふことゝ、後代の假作であると云ふことゝは、相互に推論の據ろとはなり得ないことを再び注意して置き度い。

麗紀特にその前半部に於て、本來年次の明確でなかつた各種の傳へが、編年形式に強要せられ、或は傳説時代の内容を滿す爲に、新舊取交せて前半部就中古い部分へ持つて行かれたらしいことを推定して置いた。この問題も今若干

具體的に考察して見よう。一例として先づ樂浪問題を採上げよう。即ち樂浪討伐或は攻略の記事は半前部に次の如く度々出て來るのである。

大武神王十五年王子好童が妻崔氏と計つて樂浪を攻めこれを出降せしめた話。なほ或云として「欲_レ滅_二樂浪_一、遂請、娶_二其女_一爲_二子妻_一、後使_レ歸_二本國_一、壞_二其兵物_一」と分註してゐる。

同 三十七年、王襲_二樂浪_一、滅_レ之、

美川王十四年冬十月、侵_二樂浪郡_一、虜獲男女二千餘口、

この記事を一讀すれば何人も容易に疑問を持つところであり、西紀三二年や三七年の頃に樂浪が滅亡する筈がなく、この頃は後漢の建武年間で樂浪郡の有勢な時代である。そこで、この記事をその年代から切り放して考へて見るならば、後年高句麗が樂浪郡を亡ぼしたことは顯著な事實であり、たとへ正確な年數は忘れられたとしても（口碑的なものゝ通例なことである）、樂浪と戰つたり、それを討滅したと云ふ記憶は當然残つてゐてよいのである。特に王子好童の物語などは、何時かの對樂浪事件がもとになつて物語化された英雄物語の一であらう。事實的な樂浪との抗争は、相當早くから繰返へされたやうで、『後漢書』高句麗傳に「質桓_{三十九}之間、復犯遼東西安平、殺帶方令、掠得樂浪太守妻子、」とあるのが最古の文獻である。高句麗側では正確な年次は忘れられ、傳説化されてゐたものを、編年形式をとつた麗紀ではそれを大武神王の十五年などに挿入したのである。それに對してこの時代にそんな事件はあり得ない、だから史家の机上で假作されたのだと推論することはこれ又おかしな議論である。吾々はさうした所傳を誤られた編年形式から取外して本來の所傳の位置に於て眺むべきであらう。樂浪の滅亡は幸ひ『資治通鑑』晉愍帝建興元年_{三十三}の記事によつてその年次を知り得るのであり、麗紀自らも通鑑によつて美川王十四年の條に侵_二樂浪郡_一と記入してゐる。

るのである。

年次的に正確な、且つ内容も豊富な中國文獻で用の足るところは、それによつて編年史を編輯し、國內の傳承史料をそれとは別に扱つて適宜編年の枠組の中へ組入れた、その最も興味ある例は王都關係の記事である。些細に調査すれば、國內史料と國外史料とが結びつく節々があるに拘らず、その勞を試みずに、國內史料をその傳承性の故に、古い所謂傳説時代に持込んでゐる。従つて事實は同一であるべき事項が、中國文獻による記事と、國內史料による記事との二つとして、且後者は編年的に古い時代に位置づけて記載されるような結果になつてゐる。この王都に關する文獻批判と史實の究明は、既に『朝鮮學報』第一輯所載の「高句麗王都考」で拙論を發表して置いたから、こゝに指摘し得る好例として高覽を得ば幸甚である。

以上高句麗本紀の原典批判によつて得たところを、同書により高句麗史を研究せんとする場合に銘記すべき事項として要約すれば左の二三の點が注意に上るであらう。

(イ) 麗紀の記載は、それを利用するに當つて、國外史料による部分と、國內史料による部分とに明確に區別されなければならぬ。なほ前者に屬するものの内、中國文獻よりの引用の部分は容易に證出し得るが、それとともに中國文獻と聯關してゐる事項は、間接的にそれから誘導されたものと判定して大過ないであらう。それは國外史料と國內史料とが同一事項を併せ傳へているといふケースは極めて稀であるからである。

(ロ) 高句麗史の編年枠は、自國の傳へる王家の系譜及び王曆を主典據としてつくられ、それに豊富な國外史料を當填めて内容を盛つたものである。

(ハ) 國內史料の多くは傳承的なもので、もと／＼年時不明であつたものを、編年枠に納め込んだのであるから、一應編年の枠からそれを外し、改めて傳承史料としてその史料價值を發揮させるべきである。編年填込みの誤謬と傳承史料の價值とを混合して、安易な史料批判に終つてはならない。

註

① 明瞭ではないが漢史籍による假作であらう(津田左右吉博士「三國史記高句麗本紀の批判」七二頁)。

② 「廣開土境好太王陵碑に就て」(『朝鮮古史の研究』所收)。

③ この記事は次の二十七年の光武帝の浪樂遠征の伏線の記事として光武帝紀より誘導されたものである。

④ 『後漢書』安帝紀延光元年の「遂遣使貢獻」とあるにより、年次二年をおくらせたものと推定せられる。

⑤ 麗紀が『魏志』高句麗傳の拔奇・伊夷謨を故國川王(男武)兄弟に當ててゐるのは誤りであり、正しくは次の山上王(延優)兄弟に當てるべきであること既に諸先學の指摘してゐるが如くである。

⑥ 二十年(西紀二四六年)とせるは『魏志』少帝紀及び『資治通鑑』魏紀が正始七年(西紀二四六年)に母丘儉の高句麗遠征のことを記してゐるによつたものである。正しくは正始五年即ち東川王十八年に當つべきである。(池内宏博士「曹魏の東方經略」——『滿鮮地理歴史研究報告』第十二、五—七頁)。

⑦ 母丘儉傳に梁口とあり、こゝの梁貊は梁口を修飾したものか、或は中川王十二年條に梁貊之谷の地名が見えるから、かうした地名が古くから傳へられてゐたものであらう。

⑧ 池内宏博士「高句麗王家の上世の世系について」(『東亞學』第三輯)。一二頁。

⑨ 今西龍博士「廣開土境好太王陵碑に就て」(『朝鮮古史の研究』所收)。

⑩ 池内宏「高句麗王家の上世の世系について」(『東亞學』第三輯、三頁)。

⑪ 拙著『神話と文化境域』第三章 感精型神話。

- ⑫ 同書、第一章 南方系神話要素。
- ⑬ 「百濟に關する日本書紀の記載」〔滿鮮地理歴史』研究報告第八、一二六頁〕、「三國史記高句麗本紀の批判」〔同報告第九、一六頁〕。
- ⑭ O. Latimore; "The Gold Tribe, Fishskin Tatars of the Lower Sungari", p. 56.
- ⑮ 拙著『建國神話論考』。
- ⑯ 拙稿「古代朝鮮の祭政と穀靈信仰に就いて」〔『史林』第二十一卷〕。